
楽音のイディア－

一口人口一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽音のイデイア

【Zコード】

Z40480

【作者名】

一口人口一

【あらすじ】

2030年代、音楽シーンはまだ20世紀の懐古趣味が主流だった。メジャー・デビューのチャンスを掴みかけたバンドのギタリスト・霜井怜は、突然のメンバーとの行き違いに戸惑う。そこへ新興マネージメント・レコード会社の木乃内依緒が現れる。依緒は、怜の想像を絶する目的を持っていたのだが・・・。

第1章（前書き）

この書を、未来のプログレッシヴ・ロック・ムーブメントへ捧げる

第1章

管弦楽の最初の大音響が、一瞬にして全身の細胞を四方に飛び散らせた。

全ての楽器が力強くフォルティッシモを鳴らした後には、にわかに静寂がおどされた。

交響曲が振動させるこの広大な空間と、彼自身の肉体との境目があいまいになつていく。

やがてゆつくりと何層もの和音と旋律が複雑に折り重なりながら共鳴し合つ。その残響が虚無な空間から色と形を産み出し、明るく照らされた大地と花々、日中の雲と空と太陽、その上方に層を成す漆黒の暗闇に仰ぎ見える月と星々が、同時に共存する名状しがたい景色を創造していく。

低音楽器群が地平線の向こう側まで敷き詰めた、色鮮やかな山々の壮大な景観の上空で、ヴァイオリンとフルートは絡み合いながら、幻想的な旋律を踊り始める。

「こんなメロディ、初めて聴いた……」

彼の意識は粒子となつてこの音場を漂いながら、旋律の周辺で、その高低に合わせて翻弄されるように、浮かんだり沈んだりしていった。

彼の内側にも、外側にも、音楽はあった。

「このメロディ……なんて言ひたらいいんだろう……？」

時折ホルンの和音がオーロラのような風となつて、彼を柔らかく撫でては去つていく。

ヴァイオリンは少しずつテンポを上げ、転調を繰り返しながら、天空へと駆け上がっていく。太陽に届かんばかりに急上昇するそのなめらかな表面からは、七色の光を反射している。

「この第一主題が呼び起こすものは何だろうか？」

自分の肉体が存在するよりずっと遙か昔からやつてくる郷愁なのか、絶対に手に入らない何物かへの憧れなのか、あるいはその両方なのか？

彼の言葉にならない思念はその正体を突き詰めようとすると、全くの徒労だった。

彼は同時に満たされてもいた。永久にこのままでいたい気持ちだつた。しかし、それを幸せ、などという言葉で表現することはできなかつた。

「ここは昼と夜とが共存する世界。

一瞬一瞬の響きの中に、至上の喜びと狂おしく切ない痛みが混在している。

「ここには全てがある、そうとしか言えない世界なのだ。

「これは、誰がつくった曲なんだろう？」

彼の意識に、新たな疑問が浮かび上がつた。

「これは、人間がつくった音楽なのか？」

旋律は段々と壮麗な和音を引き連れながら、さらに激しく、高く、中空を舞い続ける。

「こんな、こんなすごいものをつくれる人間がいるのか？」

音楽は決してその疑問には答えてくれない。ただただ美という圧倒的なエネルギーを鼓舞しながら、この空間全体を支配する帝王として振る舞うだけだ。

「オレには、こんな音楽は、絶対につくれない・・・」

舞い上がるようなこれまでの感情とは対照的な、沈み込むような嫉妬と失望感が彼の意識にまとわりついてきた。急速に、音楽の放つ至福から心が離れていくのを感じた。

「オレは今まで音楽のために全てを捧げてきた。やれることを全部やってきた。だけど・・・」

彼は力を弱めながら、旋律から遠ざかり、ゆっくりと落下していった。

落下は加速を強めていった。

「オレにはとても、こんな音楽はつくれない・・・無理だ」

もし、愛している女が、目の前で別の男とキスしているところを偶然に見てしまったとしたら、このときの彼に似た気分が体験できるかもしれない。

しかしその例えで言つなら、彼の心を残忍に引き裂いているのは、その二人の並び立つ姿の、あまりにもお似合いな、世界の真理に触れたかと思つほどどの調和に満ちた、そしてそれ以上は言葉にならぬいほどの美しさであった。

彼はなおも、敗北感を抱きながら落下し続けたが、それでもトランペットが奏でる新しい旋律は、まるですぐそばで鳴っているかのようにくつきりと彼の耳に届いていた。

すでにその美を受け止める力が残されていない彼にとっては、その音はもう耳障りですらあつた。

「オレには・・・無理なんだ・・・」

拡散していた彼の粒子は収束し、硬く浅黒い固まりとなつて、さらに落下の加速を強めていく。

そして、下に引っ張られる力とは別の、軽い横揺れで、彼は田を覚ました。

「新宿、新宿、ご乗車、ありがとうございました」

電車内の照明光が容赦なく怜の目の中に差し込んでくる。

怜は息を呑んで座席から立ち上がり、電車から降りた。

（危なかつた・・・乗り過ごすところだった・・・）

しかし、ここで安心してはいられなかつた。彼はすでに時間に遅れていたのだ。

たつた30円の電車賃をケチるために、一駅歩こうと思い立つてしまつたことが、遅刻の原因だつた。

彼はホームのエスカレーターを駆け下りた。

腕時計を持つていない怜は、駅構内の時計を見た。8時半。彼のバンドの演奏予定の時間と同じだつた。ブッキング・ライブの、ト
リから数えて一番目の出番だ。

怜のバンド、彼がギターを担当するロックバンド、「イエローアウル」である。

しかし、その日、怜が演奏することはない。その日に限つては、
彼は客として自分のバンドのライブを観に行くのだつた。

彼は腱鞘炎になつていた。ギターの練習のし過ぎだつた。

もともと人一倍練習熱心な方だつたが、最近さらに無理をしがちな状況、というのがあつた。

ライブをたまたま観に来ていた大手のウルテーマ・レコードのスカウトが、バンドを気に入ってくれて、演奏をもう何回か観て見極めた後に、契約したいという話を持ちかけてきたのだ。

バンドはそれからリハーサルの回数を増やし、連帯を強めていつ

た。バンド結成から6年間、憧れ続けてきたメジャーとの契約を、どうしてもつかみ取るために。

怜の左手の異常は、まずバイト先で現れた。工場の軽作業で一日に一度も品物を床に取り落とし、ひどく怒られたのだった。そのバイトは辞めざるを得なかつた。

指に瞬間に力が入らなくなることがあるようだつた。

医者に診てもらつと、しばらくはできるだけ安静にするように、ということだった。症状が慢性化しないよう、ギターの演奏はしばらく控えざるを得なかつた。

そこでバンドのメンバーは、兼ねてから仲の良かつた別のバンドでリーダーをしていいるギタープレイヤーに、無理を言って一回限りの代役になつてもらい、今回のライブを乗り切ることにしたのだ。

怜は新宿駅の改札を出て、11月の街並をライブハウスへ向かって走り出した。

安物のナイロンホールの襟元や袖口の隙間から、冷気が入り込んできた。

この街は、細かい部分では変化しているが、本質的には何十年も前からそれほど大きな変化はしなくなつていた。

今は西暦2032年。もう、ロックが生まれた時代を生きていた人間は、地球上にひとりもいない時代。軒を連ねる店は、とこぶじの新しいのができては消える、というのを繰り返している。

しかし、21世紀がはじまつたばかりの頃と比べて、驚くほど違ひはない。

ファッショング、デザインは、全く新しいスタイルが流行るということがなくなつた。

流行は、20世紀後半に確立されたいくつかの様式のリバイバルとマイナーチーンジが繰り返されているだけになつて、この時代に至つている。

今は、1960年代が流行の主流にあつた。それは、音楽にも同じことが言えた。

怜の普段着は、そうした時代の流れとは特に関係ない。いつも同じ薄手のコート、安価な合成纖維でできたトレーナーとジーンズもどきだつた。

怜は、ライブハウスが近づいてくる頃になつてようやく、電車内で見ていた夢のことを思い出した。

（）数年、年に何回か似たような夢を見ていたが、さつきのものはほど鮮明な映像と音のものは初めてだつた。

（そりいえばあの夢、あんな曲聴いたことないぞ・・・ってことはあれつて、結局オレがつくつた曲つてことになるんだよな・・・）そもそも、10歳の時に見よう見まねでギターを始めただけの怜にとつて、交響曲の作曲はもちろん、譜面を読むことすらまともにできなかつた。

だから、夢の中のオーケストラが彼の想像の産物であつたとしても、彼にはそれを移し取つてこの現実の世界へ引き出してくる方法がないのだった。怜自身も、すぐにそのことを悟つた。

頭の中で、あの夢の交響曲の旋律を想起しようとしても、ただの1小節足りとも思い出せなかつたのだ。

ライブハウスは雑居ビルの地下にあつた。幅の狭い階段を下ると、そこにいた受付の人に「招待です」と言つて自分の名前を告げた。「すいません、こちらにそのお名前がないようなんですが・・・」店員が困った顔をした。

バンドのメンバーが書いた、今日のライブに無料で入れる招待者のリストが店員の手元にあるのだが、その中に怜の名前はなかつた。

店員に迷惑をかけてもいけない、と思つた怜は、仕方なく正規のチャージを払つて中に入った。

バイト暮らしでギリギリの生活をしている人間にとつては特に、どんなことであれ、思わぬ出費というのは決して気持ちいいものではない。

（後であいつらに文句言わなきゃ。バンドのメンバーに金払わせるなんておかしいだろつて）

ドアを開けた瞬間に大音量を浴びせられる。もうすでに怜のバンド、『イエローアウル』の2曲目の演奏が始まっていた。

レコード会社の人も来てるだろつか？ 立ち見で150人ほどのキヤパがほとんど埋まっている観客を見渡した。その担当者は、向こうの左側のスピーカーの横の方で、腕を組んで觀ていた。

『イエローアウル』は、この時代の流行のひとつとなつていた、1960年代のモッズサウンドのようなシンプルでスピード感のある楽曲に、怜のどこかサイケで難解なギター・アレンジが重なつた、ポップなロックバンドだ。

バンドの演奏は、怜にとつてもかなり満足のいくものだつた。江藤のドラムと、水谷のベースは、ここ一ヶ月のハードな練習のおかげか、格段に息がぴつたりと合つようになつてきていた。

そして、声がよく伸びる津山のボーカル。バンドのフロントマンとして堂々としたパフォーマンスができるようになつてきていた。フロアの前方には、津山の女性ファンたちが、時折歓声を上げていた。

音楽的な面でのまとめ役の立場として、こつして自分のバンドのステージを客観的に見る機会を持てたといつことは、今後の活動にもプラスになるだろうことを、怜は確信していた。

（オレたちってホントにいいバンドなんだよな。自信持つていいん

だ。メジャーシーンで活動していく前に、あいつらを客側から観られて本当に良かった。そう思えば今回ライブを休むからって、あんなに落ち込むこともなかつたのにな）

怜はホッと安堵の一息をついた。

そして、彼が一番気になつてたのは、代役のギタープレイヤー、吉沢のことだつた。

短い準備期間の中で、曲を憶えていい演奏をしてくれるかどうか、という不安もある一方で、もし自分より良い演奏をされてもイヤだな、といつうライバル心もあり、複雑な心境だつたのだ。

実際のところ彼は、怜よりもシンプルな演奏で、バンドに溶け込んでいた。約一ヶ月の練習で、よくここまで自分が抜けた穴をきれいに埋めてくれたと、怜は感謝したい気持ちもあつた。背丈は怜よりも高く、ルックスも良くて、ステージでの存在感はとても代役とは思えない。

が、やはり、メンバーと6年間もいっしょにやってきて、バンドのアレンジに中心的に貢献して来た自分の演奏の方がずっと上回つている、という本音もあつた。

4曲目のバラードの幻想的なイントロ、怜のお気に入りのギターのアルペジオで始まるのだが、代役の彼にはつまく弾ききれていなかつた。

その部分の演奏には、ギタープレイヤーとしての自分の個性が凝縮されている。他の人に言つたことはないが、密かに彼が誇りしているイントロだつた。

（来月のライブでは、オレがあの部分をちゃんと弾いて見せなきやな。ウルテーマレコードの人も、オレの演奏をきっと気に入ってくれるはずだし）

怜は、来月に復帰するバンドでの自分の演奏を想像して、うずうずし始めた。

イエローアウルの演奏が全て終わった直後、彼は楽屋へ訪ねていつた。

「おう、お疲れさん！演奏良かつたよ！」

「おう、お疲れさん！演奏良かつたよ！」

「おう、お疲れさん！演奏良かつたよ！」

「おう、お疲れさん！演奏良かつたよ！」

ボーカルの津山がようやく口を開いた。そしておもむろに財布から一千円を出すと、怜の手につかませた。

「いや、おこ、オレ本気で怒ってるわけじゃねえぞ、これじゃオレが釣りださなきゃいけないし……」怜は半ば無理にせがけてみせた。

「いや、いいんだ」津山はそういうと他のメンバーに田配せした。それが合図になつて、みんなが一斉に楽器を抱えて楽屋を出始めた。「あと、今後のことだけど、オレ来週からリハに出られるから……」怜は、目を合わせようともせずにドアをくぐつしていく他のメンバーに向けて早口で言つた。

「うん、あとでメールする」

津山はそう言つと、先に出て行つたメンバー達の動きに吊られていつしょに楽屋を出ようとする怜を制するかのように肩に手をかけ、そして後から親しみを込めるかのようにポンと軽く叩いた。そして、足早に怜から離れていった。

レコード会社の人はいち早く部屋を出ていた。結果的に、怜だけが取り残されるかたちになつた。

「おい、待てよ、どうしたんだよ？」

怜はわけがわからないまま楽屋を飛び出し、ライブハウスを行こうとするメンバー達に声を荒げて呼びかけた。彼らはもう振り

向かなかつた。楽屋の外はすでに次のバンドの演奏が始まつていて、その音量にかき消されてしまつた。

演奏中のトリのバンドは集客力のあるバンドのようだつた。フロアはさつきよりもすし詰め状態になつていて、怜は彼らを追いかけよつにも、出入り口まで人ごみをかき分けていかなければならぬ。怜に、ようやくメンバーに対する怒りがわき上がつて來た。

出入り口へ行く途中、女の口の手がどこからか怜の手首を握りしめて來た。この混雑の中で、いつしょに來た彼氏の手と間違われたのだろう。怜はますます苛立つて、それを乱暴に振り払うと、出口のドアを力一杯開き、地上への階段を一段飛ばしで駆け上がつて表へ出た。

息を切らして雑居ビルの面している通りを見回すが、もつ彼らの姿はない。

怜はがっくりとうなだれた。

「・・・すいません」

（一体何があつたんだろうか。

いや、考えるまでもなく、あいつらがオレのことを避けていることは確かだ。そして、もうオレを必要としてい可能性が高い。オレが今回ライブを休んだことで、何か誤解ができたんだろうか？ オレのやる気が疑われるような、何かとんでもない誤解が？ たつた一ヶ月の間に？

オレたちは高校を出てから6年間、ずっとメンバーを変えずにつしょにやつてきた。そして、津山のボーカルと作曲の才能を最大限に生かした音楽をつくる、ということを、誰よりも一番大事に考えてバンドを支えてきたのはオレだつたはずだ。

それがみんなには伝わつてゐると思つていたのに・・・・・一体どんな勘違いがあつたんだろう・・・・・？

とにかくできるだけ早く話し合つて、行き違いを解決しなくちゃ（

怜は携帯を取り出して、津山に電話をかけようとした。その時、

「……あのぉ、すいませーん」

背中のすぐ後ろで声がした。

怜が振り向くと、そこには背の高い女の口が立っていた。
怜もそれほど身長が高い方ではなかつたが、彼女はほほ怜と変わらない背丈だつた。

周囲が暗かつたのではつきりとはわからないが、薄い色柄でロングのワンピース、ふわりとした髪が胸元の位置まで長い髪は、サイドに細い編み込みが入つていたのは見えた。

今も昔も、天井に配管がむき出しになつていて、地下のロック系ライブハウスでよく見かける感じの「、という雰囲気では決してない。この道の通りすがりだらうか、怜は最初にそつ思つた。

「はい？」怜は内省から頭を切り替えるのが精一杯で、返事をする声のトーンに気を使つていて、余裕はなかつた。

「やつと氣づいてくれたあ。ライブハウスの中で何度も呼んだんですけど・・・・・あのすいません、手をつかんじゃつて」

彼女は深く頭を下げたが、それほど申し訳なさそつでもなかつた。

「ああ、で、何か・・・・？」

「・・・・あの、イエローアウルのメンバーの人ですよね？」
霜井
さとし

怜さん、ですよね？」

「あ、ええ、まあ・・・・」

彼女の質問は難しかつた。今まだ自分がメンバーと言えるのかどうか、彼自身にも確信がなくなつてきていたのだから。

「今日、イエローアウルを観に来たんです。でも、あなたは出てませんでしたね？」

「うん、まあね、いろいろ事情があつてね・・・・」

どうしてこうも答えにくいくことばかりなんだらうか、怜は内心少し苛立つた。

(「」の口は津山のファンなんだろ？）か？ それとも、メンバーの知り合いか？

津山の今の彼女とはまったく違はずだし、まさか江藤の？
といつよい、メンバーと仲が良いなら、オレとメンバー間の確執について、何も知らされてないのだろうか？）

また、いろいろな考えが怜の頭を巡った。

「ちょっと遅かったね、他のメンバーはもう店を出ちゃったんだ、

残念だけど、ちょうど今……」怜は言った。

「そうなんですか？ それなら、それでもいいんです」「彼女はこいつしてみせた。

そして、奇妙な間をつくつてから、取つてつけたよつと書つた。

「今日は、あなたに話があつて來たので

「えっ、オレ？ オレに？」

怜に思い当たるところは何もなかつた。

「私、アイオンレコードの、木乃内と申します」

彼女は名刺を差し出してきた。

「木乃内……どこかで聞いたような……」

そこには、アイオンレコード マネージャー 木乃内依緒きのみいぢおと書かれていた。

「これからお時間いただけませんか、30分くらい。霜井さんにお話したいことがあるんですが、この辺の喫茶店がどこかで……」
依緒は頭を下げた。今度は、その態度から彼女の真剣さが怜にも伝わってきた。

「あ……まあ、『下層』でも入れそうなお店だつたらいいですよ」

怜は自分を卑下するつもりはなかつたが、初対面の人に自己紹介をする際には、自分が下層階級出身であることは早めにはつきりさせておきたい、という気持ちがいつも強かつた。

安物でそろえた普段着を見れば、東京ではたいていの人にはわかってしまうのだが、バンドでいる時には、全員それなりの衣装でそろえることもあります、言わないとわからないこともあります。

怜は一度、階級を偽つてふるまつたために、その当時の彼女の前で大恥をかいたことがあった。それ以来、彼にはその「下層カミニグアウト」が信条になってしまっていた。

「大丈夫ですよ、今田はこちらで出しますから、好きな物頼んで下さい」依緒は怜にメニューを差し出した。

怜と依緒の一人は、懐かしいレイアウトの喫茶店に来ていた。いわゆる、古き良きアメリカ、のイメージだ。しかしこの時代の、怜くらいの二十代半ばの世代には、単に今風でおしゃれな印象に映つた。

怜はコーヒーを注文すると、再び津山の携帯へかけてみた。やはりつながらなかつた。

「実はイエローアウルのサイトに、メールをお送りしてアポを取る

うとしたんだけど、お返事をもらえなかつたので。今日ここに突然声をかけてびっくりさせちゃつて」依緒は言つた。

「サイトの管理はドラマの江藤がやつてるから、オレは知らなかつたんだ」怜は窓に目をやつた。

「それに、さつきも言つたけど、イエローアウルはもう別の会社と契約寸前まで来てるから、江藤はメールに目を通してたとしても、興味がなくつて返事しなかつたのかも」

「そうですか、私が遅かつたんだ……」依緒がうつむいた。

「イエローアウルのことは津山と江藤を通して話してくれないと、もともとオレには活動のことを決める権限はないからね」

「ええ、今日は霜井さんに、お話を聞いてもらえるだけでいいです。

・・・

依緒は、頭の良い口ではあるのだろうが、どことなく社会に出たてみたいな頼りなさも垣間見えた。

店内の光の元では、暗いところでの印象以上に、依緒はとても清楚で美しい女性だった。ロングのサイドを一本編み込んで先端を固定した髪から出た片側の耳が、怜にはヨーロッパ民話の妖精を想起させた。

「私、イエローアウルにとつても惹かれるものがあつて、もし条件が合えば、うちのアイオンレコードとアルバムの契約をしていただきたいと思ってきました」そう話す依緒の眼には力があつた。

「アイオンレコードって、聞いたことがないんだけど、どんな会社なんですか？」

「今年立ち上がつたばかりの新しい会社で、小規模ながらアーティストのマネージメントとアルバム制作を一括して行なっています。ウイーン本部とメンフィスに支部があり、東京に二つの支部ができたんです。

「私たちは、商業主義に捕われない、音楽の新しい価値観を啓発してくれるアーティストを、ジャンルに関係なく求めてます」

と依緒は、何かを読み上げるかのよう答えた。

新しい音楽・・・・・ジャンルにこだわらず・・・・もつどこかで
イヤというほど耳にしてきた募集のキャッチ「ゴピー」、という印象を、
怜は拭いきれなかつた。実際、そういうオーディションなどで、本
当に新鮮だと思える新人がデビューした試しなどないじやないか、
と。

「それで、今、他に2つの海外バンドとの契約が決まつたところな
んです」

「他の2つはどんなバンドなんですか?」怜は少しだけ興味を刺激
された。

「ひとつはウイーンでデビューするアーティストで、スウェーデン
出身のガムラン奏者と、カメールーン出身の和太鼓奏者、モンゴル人
のディジュリドゥ奏者の3人が中心になつてゐるユニットです」「
へえ、その3人が、どうやって知り合つたのかは気になるけど」
怜は、その時点では、ディジュリドゥがどんな楽器かも知らなかつ
た。

「話すと長くなりますがよ

「いや、いいです。それで、もうひとつは?」怜は来たばかりのロ
ーハーを口に含んだ。

「アメリカに留学中で人工頭脳の研究をしてゐるイスラエルの学生
がつくつた、即興演奏をするソフトの音楽です。他のプレイヤーの
演奏にリアルタイムで反応しながら、生き生きした素晴らしいアド
リブをするんですよ」

確かに、キャッチ「ゴピー」に違わず、ジャンルに捕われない新しい
価値観、と怜は感じた。しかし、それはイエローアウルのやつてい
るポップなロックとはまるで畠違いであつた。

「話を聞く限り、他の二つのアーティストは、すごく個性的・・・・
つていうより、オレたちとは世界が違う、実験音楽つていう感じだ
よね?」怜は首をひねつた。

「そこは特に気にしていません。私たちは・・・・・

「ジャンルに関係なく求めてる……でしょ？　とは言つても、レーベルカラーッていうのはあるんでしょ？」

「私たちは、音楽をうわべのスタイルだけで判断しません。イエローアウルには、私たちのカラーとすごく近いものを感じたんです。依緒は、自分の審美眼に関しては、絶対的な自信を持つているようだった。

「イエローアウルのどの辺が近いの？」怜はそれが知りたかった。

「霜井さんのギターです」依緒の声は大きかった。

「えっ？ オレ？」

「今日、霜井さんがいないイエローアウルを観て、はつきりわかりました。私が好きなのは、やっぱり霜井さんのギターなんです。特にあのバーダー、なんていう曲でしたっけ？あのイントロのアルペジオ、まるでジャズかフランス近代音楽みたいな響きで、ホントに素敵です……！」

怜は、フランス近代音楽を知らなかつたが、ほめられて決して悪い気はしなかつた。特に、依緒が注目していたところは、自分が密かに誇らしく感じていた演奏でもあつたのだ。しかし、ほめる場所があまりにもピンポイント過ぎるために、若干奇妙な感じは否めなかつた。

「そ、そうか？　ありがとう……で、津山は？」

「津山さん？　ああ、ボーカルの方ですか？　はい、ええっと、歌がとっても上手、ですよね……それに、顔立ちがとってもカッコいいと思います！」依緒は急に高揚したように話したが、やや慌てた様子でもあつた。

イエローアウルは津山を中心としたバンドじゃないか！　この人は、ボーカルに関してはどうしてこうも素人臭い評価なのだろうか？　怜は怪訝な表情を隠せなかつた。

とそのとき、怜の携帯がメールの着信を伝えた。津山からの連絡だと確信した彼は急いで画面を見た。

『今日はすまなかつた。

実は、俺たちは、ギターに新しく吉沢を入れてやつしていくことと決めた。それは会社の人の希望だ。吉沢はかなり気に入られたようなんだ。

直接言えなくて悪かつた。怜もがんばってくれ。』

怜の全身から力が抜けていった。

怜が育ってきた6年間の友情と、バンドへの情熱、そしてメジャーデビューへの憧れが、こんなにそつけない言葉で清算できるはずもなかつた。

「オレはイエローアウルをクビになつた……」「怜の口から、その言葉は吐き出された。

「えつ・・・・・なんで?」

「わからない。ウルテーマレコードの人の意向らしいけど……」

依緒は何も言わずに怜を見つめていたが、いろいろ考えを巡らせているようだつた。

「オレはまだ、ちゃんと自分の演奏を聴いてもらつてもいいんだ。きっと、メンバーの中でオレひとりだけが下層出身だからとか、見た目が吉沢の方がいいからとか、そういうことなんだ……そういう、音楽とは直接関係ないとこりで判断されちゃつたんだろう……」

・・・怜は依緒に説明するといつよりも、独り言のようひつひぶやい

た。

「・・・・・」

依緒はしばらく黙つていたが、やがて絞り出すよじに言つた。「そう、かもしだれないね・・・・・状況からすると、きっと、そつなんだと思います」

怜はその言葉でさらに落ち込んだ。自分を卑下するのを、根拠なしでもいいから慰めてほしかつた、そんな自分の甘えに気づいて、ただただ情けなかつた。

「でも、でもね、よく考えてみて。そういう風に人のうわべだけを見て、音楽をないがしろにしているような連中にマネージメントを任せ、それでいいの？ それでミヨージシャンとして、満足なの？」

怜は何も答えられなかつた。怜にひとつては音楽がすべてであり、イエローアウルこそが怜の音楽のすべてだった。それ以外の理屈を考える余裕などなかつた。

「イエローアウルがないなら、もう仕方ないじゃない、霜井さんは……」

「ちょっと黙つてよ！ わかつてない奴がいきなり勝手なこと言つなよ！」怜は感情をぶちまけてしまつた。が、すぐにそれを後悔して肩を落とした。

「……ごめんなさい」依緒はつづみいた。「今日は、これ以上私と話が進められる状況じゃないよね」

「今日は、とかじやなくて」怜は首を横に振つた。「オレのバンドはなくなつたんだ。オレの音楽は終わつた。イエローアウルに興味があるなら、津山の携帯番号教えるよ。オレと話を進めて、もう意味ないだろ？」

「そんなことないよ！」依緒は意外なほどの勢いで、身を乗り出してきた。

「こんなことであきらめたら、ダメなんだよ、わかってるの？」敬語を使うのも忘れた依緒には、なんとも言い難い気迫があつた。

怜と依緒は、喫茶店を後にし、新宿駅の東口まで来ていた。
「車で送つて行つてもよかつたのに」依緒はそのことにについて再び聞いてきた。

「いや、ほんとにいいんです」怜は遠慮した。
生きがいだつたバンドを追い出された失望感に満たされ、早く一人になりたいというのが本音だつた。そうでないと、この初めて会

つたばかりの可愛い女の口に、またハッ当たりしてしまった失敗をやりかねない。

そしてそれ以上に、初対面にもかかわらず、異常なほど自分に親身になってくれる依緒に対し、かえつて警戒し始めていた。彼はそこまで自分を勘違いはしていなかつた。

「今日は、ありがとうございました」依緒が礼を言つた。

「いや、こちらこそ。オレ自身の問題なのに、いろいろ聞いてもらつちゃつて……」怜も落ち着かず、頭を下げるよう身体を揺らした。

「もう一度、演奏を聴かせて下さい。イエローアウルの曲以外の音楽を演奏する霜井さんが、一度観てみたいから……もしギターを弾く時があつたら、名刺を見て連絡を下さい。必ず観に行きますから」

依緒はそう言つと軽く別れの会釈をして、人ごみの中へ消えて行つた。

帰りの電車の中で、いろいろな思いが怜の頭を巡つた。

(この東京には、星の数ほど、プロを目指すアマチュアバンドが活動している。

その中でも、津山のボーカルはひときわ光るものがある。そう信じてオレはこの6年間をやつてきた。そして津山の歌を引き立てる演奏をするために、ギターを弾いてきた。

津山がオレから離れていつた今、自分には音楽業界の人から注目されるだけの価値は残されていない、それは、この6年間で見てきたたくさんのバンドの演奏レベル、そして味わってきたたくさんの苦い評価から、容易に計り知ることができる、そう怜は考えていた。それなのに、木乃内依緒といつも、オレの音楽性のどこに魅力を感じたのか？

とても純粋な口のようではあった。でも、何か隠された目的があ

るようにも見えた）

（そして、アイオンレコードという会社。たいした業績も上げてい
ないようなのに、国際的な活動をしていくという。どこかの大資本
のバックアップなしには不可能だろうが、ヒットする気配もなさそ
うな、マニアックな音楽だけを扱おうとしているところも不可解だ
った。どんなレコード会社なんだらうか？）

ギターを弾きたい、という気持ちが、これから自分の中から再び
わき上がりてくるのかどうか、その時の怜にはわからなかつた。
しかし、もし弾きたくなつた時には、依緒の田の前で弾いて見せ
たい、その気持ちだけは浮かんできていた。

ここ数十年で、音楽をはじめとした文化は、特に進展を見せず、10年程度の短い流行の周期をループし続けるだけだった。

しかし、怜たちが生きる2030年代までに急速に進んだものがある。

それは社会階層の形成だった。

もう、「格差」という言葉は、すでに死語になって久しかった。差を意識することは、お互いにとつて不幸なことだと、皆が気づき始めた。むしろ、しつかりと区別することの方が良策と思われたのだ。

あらゆる文化や娯楽、商品は、それぞれの上流、中流、下層のそれぞれの一ーズに合ったものに完全に区別されるようになつたことで、社会は2010年代からの壊滅的な経済不況から少しづつ回復し始めていた。

それは、音楽のジャンル分けにすら、大きな影響を与えた。

東京には、全く新しい貧困層によるスラムが、老朽化しているが諸事情から取り壊しができない旧都営団地の周辺地域に数多くできていった。主に、老人ホームなどの公営施設の建設が中断した土地に、トタン板などを使つた手作りの家の集落ができていつたのだ。近隣住民による排除運動も功を奏した例は少なく、行政も黙認せざるを得なかつた。

怜は、下層の中でも、かるうじてまつとうに生活している家族の元に生まれたが、幼い頃から、周辺のスラムの連中と接することが

多かつた。共働きの両親からは放任される一方、スラムの大人たちの間では可愛がられていたのだった。

外国とは違つて、日本の新しいかたちのスラムでは、子どもは非常に少なく、珍しがられる存在だつた。

40代、50代まで、引きこもりや生活もままならない低賃金労働を続け、扶養されていた親の死後に、生活能力を持たないままスラムへ放り出された、高齢のいわゆる独居ニートが、住人の大半を占めていた。

スラムの中には、「ぐく一部ではあるが、驚くべき才能を持つ人たちがゴミに埋もれるように生活していた。

ネットの世界で膨大な知識をむさぼり、それを社会に還元することもなく自らの無益な妄想を肥大化させていく者。高学歴・高収入だったが、人生の意義を見出せず競争社会からドロップアウトした者。そして、その価値を認められないままくすぶっている芸術家、などだ。

怜は、そんな知の混沌、とも言えるような人たちに揉まれて、有用な知識も、無用でくだらないことも、人間不信になりそうなイヤなウワサなども、たくさん教えられて育つてきた。

ギターを始めたのは10歳の時だつた。この一点だけを見れば、むしろ中流並に恵まれた音楽環境だつたかもしれない。

教えてくれたのは、昔はハコバンでピアノを演奏していた、スラムの老人、三野だつた。

ハコバンとは、夜の店などが抱えている生バンドのことで、店内でBGMを演奏するのが仕事なのだが、2030年現在はほぼ絶滅してしまつてはいる職業だつた。

彼は、高級住宅地で捨てられていた粗大ゴミのギターを拾つてきて、一週間ほど弾いた後に、自分にはすでに新しい楽器を習得する

氣力がないことを自覚すると、それを怜にタダで譲つてくれたのだ。

ただ、ピアニストであった彼は、ギターのチューニングをよく憶えておらず、怜はしばらく間違つた調律のまま弾いていた。

そして、弦が切れた時点で弾くことを断念したが、月に200円のおこづかいから100円ずつを3ヶ月貯金して、安物の弦を買って張り替え、そこからは弾くことに夢中になつていつた。

ギターをくれた老人は、ジャズピアニストとしては非常に優秀なプレイヤーだった。彼は、ギターを取り足取り教えてやることはできなかつたが、この時代にはすでに中・上流階級が占有するジャンルとなりつつあつた難解な現代ジャズの理論を、怜にみつちりと教え込んだ。

怜は、25歳になつた現在は団地を離れ、多摩地域の安アパートで一人暮らしをしていた。

未だに音楽にうつつを抜かしていることをよく思つてはいな両親には会いづらいうものの、その近所に今も暮らす三野には、時々会いに行つていた。

顔を合わせても特に話すことはなかつたが、児童遊園でいつしょにジャムセッションをすること多かつた。

夜中のうちに、商店の壁面のコンセントから電源をこいつそりと「拵借」し、その電力で、改造した古い一台のバッテリーアンプから、エレキギターと旧式の電子ピアノの音をいっぺんに出力していた。それはひどく歪んだ音で、お世辞にも美しいサウンドではなかつた。しかし、それでも、お互いの演奏の内容が確認できればそれで充分だつた。ふたりの頭の中では、それらの音がクリスタルのように澄み切つた響きとして変換されていたのだから。

イエロー・アウルの脱退を告げられてから一週間。怜は久しぶりに、三野といつしょに公園で、相も変わらず、100年も前に生まれた

古いジャズのスタンダードを演奏していた。

怜の現在愛用のギターは二代目、何年も貯金してやつと手に入れ
た、東南アジアの無名メーカー製、ストラトの安価なコピーモデル
で、しかも中古だった。

1曲が終わって、三野はやや満足そうな顔をした。彼は、生涯で
この曲を何回演奏してきているのだろうか？

演奏後、普通の人間関係なら充分気まずくなるほどの沈黙が流れ
た。

その後に、三野は言った。

「お前、もう手は大丈夫なのか？」

「もう2ヶ月近く休んでたから、大丈夫。それに、もうずっと弾き
続けるかどうかもわかんないし」

「なんで？」

「あのバンドを追い出された」

「そうか」

三野は理由を聞かなかつた。バンド内でのいざれいざなど、彼自身
はあらゆるケースを今まで見てきているのかもしれない。

その一件で人間不信になりがちな状態だった怜は、三野のいつも
の寡黙さを少し心地良くさえ感じた。

「今日は、人を呼んでるんだ」今度は怜から話した。

「誰？」

「いや、オレの演奏を見たいって口がいて」

「……あの口か？」三野が指差した。

公園の入り口の方に、黒のスーツを着た女性の姿が現れた。依緒
だつた。

「初めてまして、木乃内と申します」依緒は駆け寄つて来た。

「ほう、サトシの彼女か？ そんなの高校生の頃に見たキリだな」

「違うよ、レコード会社のマネージャーだつて」怜は三野をさえぎ

るよつに言つた。

「今日は演奏を見せてもらひに来ました」依緒は頭を下げた。

「でもこの状況じゃ、レコード会社の人が満足できるような演奏なんてできないぜ。こんなアンプで、ギターとピアノだけ。しかもひとりは落ちぶれた年寄りの演奏だし」三野が苦笑いしながら言つた。
もし、怜がもう少し乗り気であれば、依緒にちゃんとした音で聴かせるために、奮発して練習スタジオの予約を入れたかもしれなかつた。でも、今の怜には、もう一度聴きたい、という依緒への義理を果たす以上の気持ちはなかつた。

「それでもいいんです」そんな怜の心情を知つているのかいないのか、依緒は期待の笑みを見せた。

「サトシには悪いが、ジャズの新人を探すなら、音大のジャズ科に通つているお坊っちゃんでも捕まえた方がずっとといふと思うがな。まあいい、やるわ」

その言葉を言い終わらないうちに、三野は高速のイントロを弾き始めた。『There will never be another you』だつた。

この曲は、スタンダードナンバーの中では、怜のお気に入りの1曲だつた。しかし、いつもよりもテンポが速い。さつきまで怜の腱鞘炎を気づかっていたとは思えないほどの三野のアップテンポに、怜はついていくのがやつとだつた。

ビーバップのオーソドックスなフレージングを丁寧にまとめてくる三野のアドリブに続いて、ソロのバートンが怜へアイコンタクトで渡された。

いつもなら、リラックスして演奏しているところだが、その時、怜にとつてこの場が訳もなく特別なものに感じられて、手が震えた。一度とはやつて来ない特別な瞬間。

オレは緊張しているのか？ 客が一人、あとはブランドとベンチしかないような公園で？

あの「」が見ている、ということがそんなにも特別なことだらうか？

そして、フツと意識が遠ざかるような感覚が来た後、怜は、一瞬ごとに無限の選択肢が広がっていく、壮大な即興演奏の海の中にダイブしていった……。

演奏が終わつた時、怜は半分夢から醒めたような感じだつた。今が朝方なのか夕方なのかも、一瞬わからなくなつていて。ところどころ思い出すのは、自分でも普段あまり演奏したことがないようなフレーズを弾いていた、ということだつた。

「所々へんちくりんだつたが、良い演奏だつたな」三野が言つた。ほめてくれるなんてめつたにないことだつた。

「あんまり弾いたことない感じのアドリブだつたかな」怜がつぶやいた。

「練習せずにぶつつけでやつたりすると、たまにそういうことがあるんだよな」

三野は、怜に何が起きたか、見抜いているようだつた。

「でも、練習不足つていうのは、たいていの場合は、悪い結果しか生まないけどな」

(あの「」は・・・木乃内さんは、この演奏をどう思つただろう?)

依緒は、演奏に聴き入つていて、公園のブランコを一生懸命漕ぎながら。

「すつーー！すばらしい！やつたあ！」依緒が高く評価しているのは、演奏の方なのか、ブランコの方なのかは、にわかには判別しつくかったが、常軌を逸した喜び方であることは間違ひなかつた。

そして、大きく揺れたブランコの高い位置から勢いよく飛び降り

ると、依緒は満面の笑みで怜に近寄つて行つた。

「霜井さん、音楽をやり直しましょ。バンドでやるなら、メンバー探しも手伝いますから」

「今の演奏で、何かわかったの？ 普通のジャズのスタンダードだよ」怜は彼女の喜びようについていけなかつた。

「はい、もうよくわかりました。私は、演奏のジャンルとか、形式とかは気にしてませんから」

「じゃあ、何を気にしているの？」

「その、向こう側にあるもの、ですよ…」

怜は依緒の、発声だけが明瞭で、意味は不明の返答に言葉を失つた。が、ここはどうしてもお互に納得しなければいけないとこら、引き下がつていけない、と感じた。

「だって、イエローアウルの曲はみんな津山の作曲なんだよ？ オレには今、何も残つてないんだよ？」

「霜井さんは、すぐに作曲を始めて下さい。バンドの編曲ができるんだから、作曲もできるはずです」

歌手ならともかく、持ち曲が一曲もないアーティストと交渉するレコード会社なんて、聞いたことがない、怜は、それ以上はあきれても言えなかつた。

「やりますよね？ 新しい音楽を」

「わかった、やるよ」怜はっこ、そう返事をしてしまつた。

しかし、アイオンレコードと契約する、とは言つていなかつた。あまりに簡単に怜の才能を過大評価しようとする依緒、怜にはそこには何か怪しい理由があるようと思えて仕方がなかつたのだ。

（依緒は、オレを利用する」とことで、何の得があるのでうか？）

三野と依緒は、並んでベンチに座つていた。そして今度は、怜の方がひとりでブランコを漕いでいた。

「怜は、下層にしちゃ、今どき変わったタイプの若者だと思つよ、

「才能があるかどうかはわからないがな」三野はタバコを吹かしながら言つた。

「あいつはガキの頃から、オレたちスラムの年寄りミュージシャンどもから、いろいろ教え込まれてるからな。上流も下層もみんな分け隔てなく、いろんな音楽を聴いていた時代の知識をよ」

依緒は黙つて相づちを打つていた。

「まあ、今はそんなの時代遅れかもしだれねえけどな。

だつて、今はロックにしたつて、クラブっこにしたつて、やつている子どもはほとんど、音楽好きの親の英才教育でやつてゐる、中流以上の「たちはばかりだろ？」

下層の「たちは、そんなハイクラスの音楽が自分らにもできるなんて思つてねえつて。スポーツにしても何にしても、根気よく練習する忍耐つてのがないし、楽器に触れるチャンスすらなくなつちまつてゐる。

そんで、なんでも面倒臭がつて、手つ取り早く気持ちよくなりたいからつて、悪い大人にダマされてクスリとかキメたり、ぐだらないことばっかりやつてんだよ・・・・」

三野は我に返つたようになつて、苦笑いした。

「悪い、ついしゃべり過ぎたな。年寄りの悪いクセだよ」

依緒は、真剣な表情で言つた。

「いえ、よくわかります。私たちもそれを少しでもよくしたいって思つてますから・・・・」

一方、怜はブランコに揺れながら、冬を迎へ、葉を落とした遊園の木々を眺めていた。

すると、彼の頭の中に、聴いたこともないような、短かいメロディが流れ出した。

やがてそのメロディは、繰り返しながら対旋律を派生させ、長いパターンに展開していった。

これは、怜がギターを弾き始めるずっと前の、小さい頃からやつ

ていた、彼の退屈しのぎの一人遊びだった。お金もかからず、友達も必要なく、時間の限り続けられる一人遊び。しかし、つくつたメロディは、そこから気持ちが離れてしばらくすれば、すっかり忘れてしまうことがほとんどだった。

そうやってできたメロディを、記録しておく価値のあるものとは、考えたことがなかった。

「オレが作曲か……」怜は、空を仰ぎながらブランコを漕ぎ続けた。

三野と別れた怜は、今回は依緒の車で自宅アパートまで送つてもらうこととした。

依緒の車はドイツ製の高級車だった。怜はもちろん、こんな車に乗るのは初めてだった。

（もともと資産家の令嬢なんだろうか、それとも、アイオンレコードというのはそんなにはぶりがいい会社なんだろうか？ 所属しているアーティストの傾向や知名度を考えれば、とてもそんな風には思えない）

怜の疑問は深まるばかりだった。

「木乃内さん……」

「今度から、依緒、つて呼んでいいよ」依緒はにこやかだった。

しかし、怜とは温度差があった。

怜は、右側の助手席という、初めて座る位置からの街の風景に目をやつたまま、依緒に鋭く質問した。

「オレみたいな、普通の、ごく平凡なアマチュアのギター弾きを相手にして、いつたい何の得があるんだ？ 他にもっとカッコよくて、才能がある奴なら、この東京にいくらでもいそつじやないか。オレに目をつけた本当の理由は何なんだ？」

「だから、霜井クンのギターは個性的だし、すげー……」依緒は微笑んだまま言った。

「そうじゃなくて！」怜は声を荒げた。

「今まで6年間バンドやってて、よそのバンドのうわさをいろいろ聞いてきているんだ。レコード会社から契約を持ちかけられた奴らの話をね。

例えば、すぐにテレビでレビューさせる、って口だけうまいこと言われて、バンドのメンバーから法外なレッスン料やレコーディング代を負担させられて、払うだけ払つたら、たいした世話もせずに放つておかれるとか、そういう話だよ」

「……そう、それは気の毒だね」依緒は低い声で言つた。「それで、アイオンレコードも、そういう人たちと同類だつて言うの？」

「でも……」

依緒は一瞬、言葉をためらつた。

「でもあなた、下層、なんでしょ？」彼女も運転で正面を向いたままだつた。

「霜井クンは、ある時は貧しい自分を卑下しておいて、そのくせ、ある時は自分にお金手当で寄つてくる人間がいるなんて思つてるの？ それって何か変じゃない？」

これには怜はグーの音も出なかつた。まったく依緒の言つ通りだ、と思つた。金銭トラブルに引っかかっているバンドは、みんな中流・上流の出身だつた。

それからは、車が怜のアパートに着くまで、お互に口を利くことはなかつた。

怜の住まいは、木造の老朽化したボロアパートだつた。

怜の一階の部屋のドアを叩くノックの音が、アパート正面に停めた車から降りた時点で、外に響いていた。

怜はあわててきしむ階段を上つて行くと、そこにはアパートの大家の中年女性がいた。

「なんだ、居留守じゃなかつたのね」大家は怜に気づいた。

「あんた、いい加減、家賃を払つてちょうだい…」二ヶ月の滞納はほんと困るから！」

「すいません…‥」怜はそれ以上何も言えなかつた。

大家は怜の肩越しに視線を移した。「あんたね、ギターなんかで生きる余裕があるなら、支払いできるでしょ？」

そして、怜の肩のボロボロのギターケースに手をかけた。「どうしても払えないなら、これ、預かつとくよ。近所の質屋でいくらかにはなるでしょ」

「いや、待つて下さい」怜は弱氣な声とともに引き下がつた。

「こつちだつてあんたみたいな輩はいっぱい見て來てるから、家賃払わないのに対処する方法は心得てるんだよ。甘く見られたら困るよ」大家が睨みつけた。

確かに大家は今まで、金にルーズな者やヤクザ者たちをたくさん相手にしながら、このアパートの管理をやってきていた。夜逃げされて滞納金を踏み倒されたことも度々だつた。そうした経験から、年を追うごとに、支払いが遅れる者への態度は容赦がなくなつていつたようだつた。

「それに触らないで！」廊下全体に共鳴するような絶叫が響いた。怜はもう帰つたと思っていた依緒が、そこにいた。

車でもう帰つたと思つていた依緒が、そこにいた。
「それに触らないで、つて言つてるのー。わかるでしょ？ 触るな
つて！」

依緒の細いノドから振り絞られる動物的な威嚇の声は、滑稽なく
らいの不慣れさが、かえつてその覚悟の深さをうかがわた。
大家が、本氣でギターをその場で取り上げるつもりだつたかど
うかは、怜にもわからなかつた。その時点では、単なる脅しである可
能性の方が高かつただろう。

しかし、依緒の怒り方は普通ではなかつた。怜は、依緒のなりふ
り構わない叫びに驚いたが、彼女の声は、怜の心を代弁してくれて
いるようでもあつた。

怜にとって、ギターというものがどれほど大切か、その依緒の震
えたハイトーンが物語つているかのよつだつた。

(でも本当は、彼女にとつてはそれ以上の意味があるのかもしけな
い)

怜には一瞬、そんな風にも思えた。

「あんた、誰？ ジャあどうにかしてくれるの？」大家も少なから
ず、その声にくじかれたようだつた。

「・・・・いくらですか？」依緒は早くも落ち着きを取り戻してい
た。

「三ヶ月で9万6千円よ」

「口座番号は？」携帯を取り出した依緒の声はさうにそつけなかつ
た。
「MSネット銀行、普通046・・・・」大家も、依緒の意図を理
解して、ゆっくりとした口調になつた。

依緒は言われた番号を携帯に打つていった。

「しばらくしたら、確認して下さい。今、振り込みましたから、2

0万」

「いや、家賃は9万……」

「向こう3ヶ月分もまとめてお支払いしました。端数はお詫びのつもりです」

依緒は、怜に部屋に入るよう日に日で促した。そして、ドアを開けて中に入る怜の背中を押して、自分も後に続いた。

「お嬢さん、払ってもらってる私が言うことじやないけどね、そんな男……」部屋に入つていくふたりを眺めながら、大家が諭すように言った。

何が言いたいのかを察した依緒は、「お世話様です」というと、速やかにドアを閉めた。

「ごめん、必ず返すから……」怜の自尊心は打ちのめされていた。

元々、メジャー・デビューを目指すイエローアウルのために、活動費用がかかっていたところへ、腱鞘炎のためにバイトを辞めざるを得なくなり、治療費もかさむなど、怜は経済的に追いつめられていたのだ。

しかし、そんな言い訳を口にする気力すら、彼には残つていなかつた。情いついでいっぱいだった。

「大丈夫よ」依緒は、うつむいたままの怜にあつさりと言つた。

「モーツアルトやショーベルトなんて、もっと酷かった……らしいから」依緒のその言葉は、怜には聞き流されていた。

怜の部屋は、片付いているといつよつは、物がなくて殺風景な4畳半の1Kだった。

あるのは、テーブル、棚、スタンドに寄りかかった1本のエレキギター、冷蔵庫と同じくらいの大きさの改造されたギター・アンプ。

そして、流行りの60年代モッズ風のスースが壁にかかっていた。イエロー・アウルのライブでの激しい動きと汗に耐えてきた、一張羅だった。

「霜井さん、こういうかたちで話を進めるのはイヤだつたんだけど・・・アイオンレコードと契約して下さい」依緒は事務的な声で告げた。

「さつきのお金はもちろん、私のお金じゃなくて、アイオンのお金なの。アーティストへの資金援助は、うちの会社では、最初から契約書にも盛り込まれている内容なのよ」

「えつ？」

「ほら、ここに書いてあるでしょ」依緒は、カバンに入れていた契約書を取り出し、ある条項を指差した。

「つまり、さつきの家賃は、うちに契約して、出世払い返して下さい」

（いづして怜は、自宅の粗末なテーブルの上で、アイオンレコードの契約書にサインすることになった。）

（特別な才能もなく、持ち曲すらないアーティストに、最初からお金を貸すことを見越して契約するレコード会社。そんなお人好しな会社が、この世にあつていいのだろうか？

彼らの本当の狙いは何なのか？）

彼女は、契約書の内容をひとつずつ読み上げ、難しいそうな条項については噛み砕いて怜に説明した。確かに、極端に不利益だと気が悪いと感じられる項目はない。

基本的には成功報酬が、ライブでの演奏や、制作したアルバムの

売り上げに応じて、怜に支払われる、ということだった。

それでも怜から、疑念が完全に晴れることはなかった。

しかし、契約したことによって、怜にある種の責任感が芽生えたことは確かだつた。

彼は、依緒が契約書を抱えて帰つたその日のうちに、自宅の三世代前の旧式パソコンの作曲ソフトで、デモの制作を開始した。

今まで貧しさゆえに、他に趣味や娯楽も持たず、ヒマさえあればずっとギターの練習をすることが当たり前だった怜。バイトなど他の用事がない日は、一日六時間練習することはザラだつた。

しかし、腱鞘炎がひどくなるのを防ぐためにも、練習の時間を三分の一以下に抑え、その分、作曲に時間を使うようになった。

極力手に負担のかからないようにギターを調整し、今までより細い弦を使うようにした。アスリートさながらに、力を抜いた演奏フォームの改造に取り組んだ。そして炎症の回復のために、貧しい食生活ながら栄養にも気を使い、再起へ向かって細心の注意を払つた。怜は、経済的にも、これ以上依緒に迷惑をかけて情けない思いをするのはイヤだった。新しいバイトも探さなくてはならない。とても忙しい毎日となつた。

アイオンレコードがどんな連中なのか、あれこれ詮索している場合ではない。早く自分をイエロー・アウルから切り離し、契約アーティストとして、人前で披露できる音楽を生み出したい、その一心だつた。

そして、依緒を喜ばせる曲をつくりたい、という気持ちが、その信念の中核に芽生えつつあつた。

怜に芽生えたその気持ちに、依緒は毎日欠かさず水を注いでいた。依緒は、アイオンレコードの海外契約アーティスト、トライバル・ユニット「ボクシン」と即興演奏する人工知能「ルディ」のアルバムの、プロモーションの仕事に追われていた。が、その合間に縫つ

て、怜にはママに連絡を入れていた。

彼女の声が、怜の創作意欲を刺激し、励みとなつた。

「もうこれからは、流行に左右されないで」「自分の内側から湧き出てくるものをつかまえて」

それが、怜と会話する度ごとの、依緒の口ぐせのようになつっていたアドバイスだった。

イエローアウルでは、流行の1960年代リバイバルのサウンドを意識していた。

メジャー・デビューを目標とした、イエローアウルでの6年間の活動の中で怜は、自分のやりたいことと、流行が求めていることの区別がなくなつていた。それは幸せな状態だったのかもしれない。（でも、それが本当にオレのやりたいこと、オレのやるべき音楽なんだろうか？）

生まれてきたこの新たな葛藤の中で、彼の新しい音楽のエネルギーが渦巻き始めていた。

怜がやりたかったのは、今までの彼のすべての経験が、正直に凝縮された音楽だった。

スラムで体験したあらゆる出来事。三野から学んだ古いジャズ。そして、津山たち中流階級と背伸びして関わりながら吸収したロック。それらの融合だった。

例えるなら、1960年代後半から70年代初頭の時代の前衛的ロック。

ロック音楽がビッグビジネスと結びつく前の時代には、クラシックやジャズにも負けない知性と創造性を獲得するために、真のアーティストたちは実験を繰り返した。

そして、その実験精神をレコード会社も率先して支援した、そん

な理想的ながらも、はかなく短い時代のロックだ。

その時代のスタイルをまねる、ということではなかつた。それは結局、現状の懐古趣味のループへと舞い戻つてしまつ。その精神を受け継いだ、21世紀にふさわしいサウンドをつくりたかつたのだ。

怜の構想は固まつていつた。

（そして伝えたいことは、言葉を超えた何かだ。だから、ボーカルは必要ない）

「怜クンの曲は、ギター、ピアノ、ベースとドラムの4人ができるんだね？」

依緒は、この日は自宅へ訪ねてきて、怜が作曲したデモを聴いていた。いつしか、怜を霜井さんではなく、怜君と呼ぶようにもなつていた。

「それなら、ギター以外のメンバーを探さないとね」

「オレも、ツテのあるところにはみんな相談したし、ネットで募集もかけてるけど、なかなか腕の立つ奴は見つからないね」

怜は、ネットの募集掲示板をスクロールしていた。

「大丈夫、私たちも探しているから」

依緒は自信ありげに言った。

それから一週間後、作曲に打ち込む怜の携帯に、依緒の着信が入つた。

「怜クン、今大丈夫？」

「あ、うん」

「そこから歩いて20分くらいの距離なんだけど、来てもらえない

かな？ 手伝つてほし」とあるんだよね、今から場所を教えるから」「

「いつまでも彼女の話には言葉が足りない、と怜は思つた。

「何をやるの？」

「大掃除！」依緒は叫んだ。「今まで経験したことのないくらいの、すごく掃除！」

そこにはゴミの山だつた。一部屋ある、怜の部屋よりは広めのアパート、その床全体を覆い尽くす空の缶、ペットボトル、ビニール袋、プラスチックの破片や、その他訳のわからないもの。それらが異臭とともに強烈な忌まわしさを醸し出していた。

その部屋の奥の角には、黒い練習用ドラムのセットがあった。その周辺だけはゴミがなく、いつでも使えるようになつていていた。

そして、その椅子には、Tシャツに短パン姿の、小柄な肥満体の若者が座つていた。

「私一人で、今日一日でなんとかなるかと思つて、午前中から始めたんだけど、もうひとりいないとダメだつて、お昼過ぎに気づいたの。もう明日になつたら、私もやる気ないと思うから、どうしても今日中に終わらせたいのよ」なぜか依緒の声は快活だつた。「怜くんじめん、もうこいつのゴミ袋がこっぽいだから、ここ的新しいの取つてくれる？」

日が暮れる頃には、片付けは完全ではないものの、広い方の部屋になんとか三人が座れるくらいのスペースをつくることができた。「だいぶ遅くなつたけど、紹介するね。彼は、阪元荘太くん。今28歳だつて？ 怜くんのバンドの、ドラムをお願いしようと思つているの」「

「彼に？」怜はあからさまに汚い顔をしてしまった。

「うん。それで、私もこんなに汚い部屋みせられたら、どうしても放つておけなかつたから」

莊太は何も言わなかつた。

「何か、叩いてみせてよ、すごいの」

莊太は黙つて、短パンからむき出した、あぐらをかいた太い足の両膝を、両手で同時にペチペチと叩き始めた。それは、非常に正確な一定のテンポだつたが、ことさら驚くものではなかつた。

やがて、左手が2回叩いている間に、右手が3回叩くよつになつた。8分音符と3連符の関係である。

それが途中から急に早くなり、左右の音のタイミングがバラけた不調和なリズムになつた。が、よく聴くと、一拍で左手が3回叩いている間に、右手が4回叩いているのだつた。

さらに、左手が4回叩く間に、右手が5回、というのもやつてくれたようだつたが、怜にはまったく訳のわからないものに聴こえた。

「ねえーすごいでしょ？」依緒はうれしそうに、怜に同意を求めた。

「うん・・・・」怜は返事に困つた。

(確かに常人にできることではないが、それはバンドで良い演奏ができるということとは別問題だ。それにバンドではコミュニケーションや協調性だつて必要だ。自分の部屋の掃除にも参加しない彼とは、うまくやつていけるんだろうか？)

「バンドの経験はあるの？」怜の方から質問した。

「・・・・中学で、プラスバンドについて・・・・」莊太は初めて口を利用した。

「それ以外は、特にないらしいの」依緒は補足した。「なんていうの？ 登校拒否っていうのかな、それから、あまり表では活動していないんだよね」

いわゆる引きこもりだったのだ。彼の家族はどうしているのか、

怜は聞きたかったが、カンのよつなものが働いて、それは後から依緒に聞くべきだと判断した。

「今日はありがとうね。突然呼び出して」

依緒は、いつしょに荘太のアパートを出た怜に、礼を言った。外は夕方になっていた。

「いや、いいよ。オレのバンドのためにやつてくれてることだしょ、みんな」怜は初めてゴミの山を見た瞬間を思い出して吹き出した。

「でも、彼は本当に大丈夫なのか?」

「大丈夫。ドラマの腕は確かだと思うし、悪い人じやないよ
怜は、訊きたかったことを思い出した。「彼、家族は?」

「一年前、両親とも交通事故で亡くなつたらしいの。それまで十代からずつと引きこもつていたから、家のことも仕事も何もできないで、今は貯金を食いつぶしている状態みたい」依緒は淡々と話した。
「そもそも依緒は、そうやって家に閉じこもつているアソツと、どうこうしきつかけで知り合つたんだよ?」

「へへへつ、確かにそれ不思議だよねえ」

依緒はおどけて見せて、それ以上は何も答えなかつた。

第5章

怜がベーシストを紹介されたのは、ドラムの阪元と出会ってから2週間後だった。

怜は、アイオンレコードから、来日していた即興演奏アプリケーション「ルディ」と、その開発者ジェフ・ラビンのコンサートに招待された。

彼らは、アイオンレコードのメンフィス支部の契約アーティストである。

コンサートは、グランドピアノと連動したルディの無伴奏ソロ、ジャズ・ミュージシャンとのセッション、そして開発者のジェフとのピアノ連弾などによって構成されていた。

ルディは、機械の演奏とは思えないほどに歌心があり、即興のボーカブルリーも豊富で、他のミュージシャンの音によく反応し、音で「ミュー」ケーションしながら素晴らしい音楽をつくりあげていた。

ジェフとの連弾では、ピアニストとしてはつたないジェフの演奏をフォローするかのような場面もあった。

「ルディにはね、血は通っていないけど、ジェフの魂がこもっていると思う。このコンサートを聴きもしないうちから批判する人はたくさんいたけど」

上演終了後、依緒が、隣の座席の怜に言った。

「それから、ジェフ自身の演奏も好きなの、確かに上手じゃないけどね」

依緒と怜は、ジェフ・ラビンのいる楽屋を訪ねていった。

ジエフは、怜より年下らしかった。度の厚いメガネをかけたひょろつとした若者で、実際の年齢より上に見える風貌だった。依緒と怜を見ると、氣さくにあいさつしてきた。

彼は現在、アメリカ最高の人工知能研究所の研究員でもあるのだ。ジエフと、英語がしゃべれない怜は、依緒の通訳を介して互いに自己紹介をした。

怜は、人見知りもあつてたいした会話をすることができなかつたが、ジエフから、いつかルディと共に演してほしい、と言われ、恐縮しながらも内心、奮い立つものがあつた。

そしてそこへ、初老の男と、二十代の若い男の、長身の二人組が近づいてきた。

白髪の男は、フォーマルな茶のスーツで、強い威厳を感じさせる人物だつた。

若い方は、細身の黒スーツをかなり着崩し、ブレスレットやイヤリングなど、鋭角的な銀のアクセサリーを合わせていて、いかにもミュージシャンらしかつた。髪は黒だが、光に反射したところが薄い水色に見えるように染めていた。

ふたりとも、遠くから見ても只ならぬ存在感をがあり、周囲の関係者たちの多くが彼らの方を振り向いた。

「紹介するね」依緒が間にに入った。「こちらはアイオンレコード東京の代表、秋佳です。そしてこちらは、怜くんのバンドでベースを弾いてもらう予定の、多川くん！」

「多川・・・・？」

怜はすぐに思い出した。2、3年前にメジャーデビューしたバンド「マスターフェイス」の元ベーシスト・多川鋼だつた。

怜は、マスターフェイスのことをファンと言えるほど詳しいわけではなかつたが、多川は、インディーズ時代から凄腕ベーシストとして知る人ぞ知る存在だったことは、怜もよく知っていた。

「マスターフェイスの・・・・ですよね？」

「はじめまして」多川は、うなずくように礼をしてくれたが、そのバンドの名前には反応しなかった。

（きっと、脱退したバンドのことは思い出したくないのか、もう自分と結びつけて考えてほしくないんだろう）

怜もバンドのレベルは違うが、同じような経験をしているだけに、そこはわかるような気がした。

「こちらもはじめまして。怜君」秋佳が低い声で言った。「依緒から、いろいろ話を聞いてるよ。うちの所属アーティストなのに、代表として、今まで会う機会がとれなくて申し訳なかつた。少し前まで、海外にいたのでな」

怜は、秋佳が差し出した手と握手を交わした。

「これからジエフ達との付き合いがあるので、私はあと少しで行かなければいけないんだが、今後の怜君の活動について、手短に話をさせてくれ。

もう怜君は何曲か書き上げてくれているようなので、それを来月、ライブハウスのブッキングのショーケースで、4人編成バンドのかたちでお披露目してほしい

「来月、ですか？ それで、4人、っていうのは？」

「ああ、申し訳ないが、バンドのメンバーの人選はすべてこちらに任せてくれる。腕の立つ人間を集めたいんだ。

本番前に一度リハーサルをやるだろう。その時までもう一人、キーボードが弾けるのを連れてくる。私の方のツテで探してきた。彼女は他の演奏の仕事がすごく忙しい口だから、日程を合わせるのが難しい。正式メンバーではなく、しばらくはセッションマンとしての参加になると思う」

キーボーディストが女の口であることと、この人物からだいぶ実力を買われている、ということは、怜にもわかつた。

しかし、これだけ実力者をそろえてくれたのはいいが、肝心の自

分の曲と演奏の腕前は、評価されなくてもいいのだろうか？

「あの・・・僕の曲については・・・」

「日程とか、あとの詳しいことはみんな依緒に任せたから、心配はない。じゃあ、そろそろジェフと行かなきゃいけないから。そっちもライブ当日は観に行くので、楽しみにしてるよ」と言つと、秋佳はさつきと行ってしまった。

アイオンレコードとこう無名の会社、最初はどこか怪しこと/or>つていた怜だが、ここへ来て、知られざる強者を発掘する、その人脈に驚かされるばかりだった。自分の実力が、彼らとの比較に耐えうるものなのか、かなり心配になるほどだった。

「ルディ」のコンサートの日以来、急に高まってきた怜のプレッシヤー。それにもなつて、作曲のペースも落ちてしまつた。怜は、自宅アパートで、進まない作曲作業に悶々としていた。発想が思い浮かぶままで、夢中になつてやついているうちはよかつた。しかし、ライブの日程が決まり、たくさんの人人が聴きに来てくれるのを考えると、迷いが生じてくる。

何を聴かせても喜んでくれる依緒の態度に、すっかり甘えた状態になつてしまつて、自分を恥ずかしくも思った。

リハーサルの日まで一週間となり、書くべき曲数が残り一曲となつたところで、まったく作業が進まなくなつて來た。

ブルームスの交響曲第4番・第一楽章の悲壮なメロディが、冬の朝の冷氣のように、怜の全身を包み込んだ。

その日は、プロの交響楽団のコンサートを聴きに來ていた。

もちろん、怜が自分から聴こつと思つ音楽ではないし、まして普

通にチケットを買って観る金銭的な余裕もなかつた。おそらくこの会場にいる人間の中で、下層階級の人間は、怜ひとりだけだつて、ということだが、彼には気にならないではなかつた。

しかし、そんな雑念が意識の外からすぐに追に出されるくらいで、怜はこの荘厳な音世界に没入していった。

ブームスは生前、自分は靈感によつて作曲している、といつことを告白していたらしい。そして、後世に残る価値のある音楽は、みな靈感に基づいてつくられている、と。

怜は、自分が時々見るオーケストラ、のよつなもの、の夢を思い出した。

(自分程度のレベルのミュージシャンが観る夢が、ブームスの言うところの靈感に当たるものなのかどうか、それは疑わしい。

しかし仮に、その夢が充分に価値のあるものだつたとしても、それをこの現実世界に引っ張り出してくる力が自分にはない。ましてそれを、みんなに感動を与えるレベルで表現するなど……。

)

このコンサートのチケットは、旧友がくれたものだつた。その旧友は、このオーケストラの中で、クラリネットを吹いている、西沢だつた。

上演後、怜は西沢と会うことができた。

ホールの廊下のベンチで、怜は西沢からおじつともらつた自販機のコーヒーを飲んだ。

西沢は、10代の頃、ジャズのサックスプレイヤーを目指していた。そして、ライブハウスのセッションで演奏する他、三野をはじめとしたスラムのミュージシャンとも交流していた。

普通、上流階級が自ら進んでスラムに入つていくことなどめったになかつたが、彼はブラックミュージックの歴史などを知るうちに、自分も日本のスラムの文化から何か学びたい、という物好きな気持ちが芽生えたようだつた。

そんな中で、怜は三野を介して西沢と知り合つた。怜にとつて西沢は、下層を差別しないで接してくれる、唯一の上流の同世代であり、ふたりはすぐに友達になつた。

その後、西沢は親の希望でクラシックの音大に進学し、それからはジャズを離れていたが、時々連絡は取り合つ仲だつた。

「久しぶりだな。新しいバンドを始めるつて前聞いたけど、がんばつてるのか？」

「うん、まあね。いろいろ決まつたら、またメールするよ
バンドはまだ、西沢に胸を張つて説明できる状況ではない、と怜は思つた。

「メンバー探ししてるらしいけど、協力できなくて『ゴメンな。もうロックとかやつてる知り合いはいなくなつてるから』西沢は謝つた。
「いいんだ。所属してゐるレコード会社が紹介してくれて、メンツは固まりそなんだ」

「えっ、そうなのか？　いいところだな、なんて会社？
「アイオンレコード。知られてない会社だけど」

「アイオン？　聞いたことないな、どこにある会社だ？」

怜はアイオンレコードの事務所に行つたことはなかつた。西沢の質問に答えられないのを恥ずかしく思いながら、彼は依緒の名刺を出して、所在を確認しよつとした。

「えっ、まさか？」

名刺を見た西沢が驚いたのは、渋谷区の住所の方ではなく、名刺の氏名の方だつた。

「木乃内依緒つて、木乃内勇のお姉さんだろ？」

「えつ、知つてゐのか？」怜は驚いた。

「ふたりとも、オレと同じ音大の出身だよ。お姉さんは中退したらしいけど、弟は同級生だよ」

「そうだったんだ……」

「木乃内勇は友達付き合いにはなかつたけど、すぐ優秀で、学内では有名なピアニストだった。今は木乃内楽器のデモンスト레이ターをやつてるはずだよ」

「デモンスト레이ター？」

「会社の製品の楽器を『デモ演奏』して紹介する仕事だよ。普通は地方の楽器屋を回るような仕事なんだけど、あいつはコンサートピアニストに負けないくらいの技術があつて、ルックスもいいから、半ばアイドル的な扱いされてるよ。

その上、木乃内楽器の社長の子だもんなん

「……つていうことは、依緒、の方も？」

怜は、木乃内楽器を聞いたことはあつたが、彼女の名前と結びつけるところまでは考えが至らなかつた。

「そうだよ。彼女は学年が違つたし、作曲科だったから、ウワサを聞くだけでほんとかどうかよくわからないけど、お姉さんの方はだいぶ変人扱いされてたぜ」

「変人……」怜は、その語に突き刺さるような痛みを感じた。

「ああ、話によると、時々意味不明なことを叫んだり、奇行が目立つたらしいな。新興宗教にハマつてたどとか、どこかの年寄りの愛人になつてたどとか、いろいろ言われてたらしい。あくまでウワサだけどな」

「……」

「信用できる奴の話だと、未来を読んだり、人の心を読んだりしているとしか思えないようなおかしな言動がいつもあつて、それが原因で友達をなくすことが多かつた、とか」

怜はその話を聞きながら、なんだか自分の恥ずかしいところを暴露されているかのような、なんとも言えない屈辱感を感じていた。

しかし、西沢が知っている依緒のことは、知れるだけすべて知つておきたいという気持ちもまた、同時にあった。

「他には？ 依緒のこと？」

「他に？ 「うーん、中退した後は海外に行つた、らしいとか……。もう何年も前のウワサ話なんでよく思い出せないが……」 西沢は首をひねつた。

「そうか、ありがと……」

依緒の意外な過去を知つた怜は、少なからずショックを受けた。

「悪いことは言わない、その姉さんの方には近づかない方がいいと思う。レコード会社からテレビの話をもちかけられて、ひどい目にあつてる奴の話は、今までたくさん聞いているだろ？ けど、このアイオーンっていう所も、ちょっと怪しい気がするぞ。」

そういう会社とは、確かに何か違うが……。もしかしたらカルトか何かと関係があるのかもしれない。しばらく様子を見るにしても、充分注意した方がいいぞ！」

「うん、わかった。気をつける……。怜はうなだれるよう、元氣になっていた。

西沢は、自分を心配して言つてくれているのだ……。怜は、自分の中からわき上がる強い苛立ちと失望感を、西沢のせいにしないように自分を制した。

「じゃあ、オレ、もう行かなきやいけないから。また連絡するね」 西沢は腕時計を気にすると、ベンチからゆっくりと立ち上がり、怜に手を振つた。

「おう」

別れ際、笑顔をつくつた怜は、じぱりくひとつでベンチに残つていた。

リハーサルの日。

依緒は都内のアマチュア用の練習スタジオに、予約を午後6時から9時まで3時間とつていた。怜はそこへ1時間前に、一番早く来ていた。

時間の10分前、スタジオのスタッフが、前の時間に予約が入っていないから、と部屋に入ってくれた。

それとほぼ同時に来たのが、ベースの多川鋼だった。

彼はインディーズシーンでは半ば伝説化した存在と言つてもいい達人だけに、やはりそのオーラは並々ならぬものがあつた。

「おはよ、今日はよろしく」鋼は防音の分厚いドアを開けて部屋に入ってきた。

「よろしくお願ひします」鋼の年齢は年下かもしかなかつたが、敬語を使わざるを得ない、そんな雰囲気だつた。

「君はなかなか面白い曲を書くよね。今日は楽しみにしてるよ」「は、はい。どうも」

「どんなギター使つてるの？ 見せてよ」

鋼は壁に立てかけてあつた怜のギターケースを手に取ると、中のギターを取り出した。

東南アジアの無名メーカーがアメリカの老舗ブランドに似せてつくった安物ギターだった。

「ストラトの『ロッピーモデル』か。使い込んでるからか、鳴りがいいな」鋼はすさまじいばかりの速く正確な運指で、指板の端から端まで縦横無尽に弾きまくつた。そのテクニックは、怜のそれを軽く凌駕していた。

「す、すごいね」怜は、発する声が裏返りそうなほど衝撃を受けていた。

「ギターもそんなにうまく弾けるのに、どうしてベースを？」

「ベースはね」怜のギターを彼に渡すと、今度は自分のケースから楽器を取り出した。木乃内楽器のオーダーメイド・ブランド『ドラゴンズロア』製の、高級感あふれる紫の光沢を放つ6弦フレットレス・ベースだった。

「ベースは、楽器の音を星に例えると、太陽なんだよ。それで、他の楽器は、その周りをぐるぐる回っている惑星なんだ。それでオレは、バンドの中心にいるベースが好きなんだな」

そんなロマンチックな例え話も似合つてしまつところが、錆にはあつた。

フレットレス・ベースは、ヴァイオリンのように、音程を決める金属のフレットが打ち込んでいないため、フレットがあるものより運指の正確さが要求される。しかし彼はそれを歌心たっぷりに弾いて見せた。

依緒と荘太は、時間ギリギリに現れた。

「放つておくと心配だつたから、荘太君といつしょに車で来たの」依緒は遅かったことを詫びた。

「キーボードの絵美ちゃんは、もうちょっと遅れてくるから、先にやつて」

そういうと依緒は、絵美と待ち合わせ場所にしている駅前へと、再び出ていった。

荘太は、ドラムの椅子に座ると、意外なほどできぱきと、自宅から持つて来たスネアドラムをセットし、チューニングし、キットの各楽器の位置を調整し始めた。

そして、いきなり暴風雨のよつに激しいシングルストロークでウオーミングアップすると、シンバル・スタンドを倒さんばかりの勢いで、ドラムソロをやってみせた。

一同は啞然とした。

荘太はあまり表情を変えなかつたが、彼が興奮気味であることは、ドラムの音が物語ついていた。

「ほおー」鋼はうれしそうに笑った。「面白いバンドになりそうだな」

「じゃあ、準備が良ければ、1曲ずつ通していく」「怜がみんなをまとめた。

怜の曲は、ジャズとロックの両方のバックグラウンドを持つ怜らしい、パワフルで創造性に満ちたインストゥルメンタルだった。

怜は、依緒からのアドバイス通り、各楽器が演奏しやすいかどうか、ということをほとんど考えず、彼の心のおもむくままに作曲した。

そのため、非常に難度の高い曲が多く生まれたが、鋼と荘太はそれをものともせずに弾きこなしてしまった。

鋼のベースは、堅実な低音で、メロディアスにバンドを支え、キー・ボードが不在の和声の乏しさを充分に補う働きをした。

荘太のドラムは、打点が線や面を描くような豊かなダイナミクスで、バンドの心臓を鼓動させていった。

そして、怜のギターは、強烈なノイズと美旋律が一体となつた、呪術的な響きすらする鬼気迫るサウンドを放出した。

怜の足下には、ギターとアンプをつなぐケーブルに中継された、ペダル型の機械エフェクターがあつた。それは、とあるスラムの住人がつくってくれた自作の『ファズ』で、それが怜の個性的なサウンドの一要素にもなつていた。

イエロー・アウルに加入した頃、三野の知り合いだった元オーディオマニアが、電気工作の特技を生かして怜にプレゼントしてくれたものだ。そのファズがつくり出す、伸びのある歪んだ音を、怜はとても気に入り、ずっと愛用していたのだった。

演奏自体は、鋼と荘太の演奏の正確さに比べると、荒削りな部分もあつたが、彼の作曲、即興の能力は、メンバー達に大きな可能性

を感じさせぬに充分なものだった。

「お待たせしました、絵美ちゃんが来ましたー！」

演奏が一通り終わつたところで、迎えに行つていた依緒が、小柄な女の口といつしょに部屋に入つて來た。

「前の仕事が押しちやつて、『ゴメンナサイ』その口、絵美は、入つてきた室内を明るくするような華やかさを持つていた。

絵美は、流行りの1960年代風なミニ丈のワンピース姿で、ショートヘアからのぞいたティアドロップ型のピアスが大きく揺れていた。

「初めまして、よろしくお願ひしまーす」絵美はあいさつすると、背負つてきたキーボードをスタンンドに乗せた。

絵美を含めた四人での演奏がはじまった。

絵美のプレイは、一人でオーケストラを演奏しているかのような重層的なサウンドで、怜、鋼、莊太の攻撃的な演奏を、多彩な音色で包み込んだ。

「最高、最高だよ！ 絵美ちゃんすごいよ！」依緒は興奮していた。

「そう？ 実はデモも聴いている時間なくて、演奏も初見なんだけど。アレンジも適当だから、直すところあつたら言つて下さいね」

絵美は怜を見て、平然と言つた。

彼女のそのゆるぎない、計算し尽くされたプレイが、初見と即興によつて組み立てられたものだとは、どうにも信じがたかった。どんな方法でどのくらい練習したら、そんなことが可能になるのか、彼には想像もつかなかつた。

怜はメンバーの中でも特に、絵美の才能に魅了され、そして打ちのめされた。

怜にとつてその日は、誇らしい一日となつた。初めて自分で作曲した音楽が、現実になつたのだ。

そして同時に、とてつもない才能に出会い、圧倒されることにもなった。イエローアウルで活動していた頃には見かけることがなかったような、桁違いの才能達だった。

リハーサルが終わると、5人は、ファーストフード店で打ち合わせすることになった。

そこで決められたのはバンド名だつた。候補はいくつも出たが、これといったものが見つかなかつた。そこで唐突に、依緒は莊太に「好きな動物は?」と尋ね、「カエル」と答えたことから『フロッグス』に決定した。

怜は、「音楽を単なる^{おたまじやくし}樂音を超えて表現したい」という意味合いからも、とても良い名前だと感じた。

「これで来週のライブ、ますます楽しみになつて來たね」依緒はにこやかだつた。「ね!」彼女はテーブルの向かい側から怜の顔を覗き込んだ。

「あ、うん……」そのとき、西沢から聞いた、依緒についてのウワサ話のいくつかが、一瞬怜の頭をよぎつた。が、彼はすぐにそれを振り払つた。

(もし本当に、彼女が学生の頃に変わり者だつたとしても、それが何だというのか。

しかし、確かに依緒は、いつもの周囲の人たちのことを考えてくれているが、自分自身のことについては、あまり触れようとしない。

依緒自身のことについて、もつと知る必要があるだらう。

でもそれは、このライブが終わってからにしよう。今は、バンドの他のメンバーと、よく知り合つた方が先決だ)

怜は我に返つて言つた。「うん、ほんとにすごい人たちが集まつてくれたけど、自分がちっぽけに見えてきて、なんだか複雑な心境だよ。みんなはどうやってそのテクニックを身につけたの?」怜は隣の席の絵美を見た。

「絵美さんは?」

「えっ、わたしはね、2歳からちょうど20年、ピアノをやつきてるから」

22歳・・・・絵美は、怜の三つ下だった。

「それに・・・・これを言うと嫌われちゃうかもしいけど、私はデザイナー・ベビーなんだ」

怜は、本物のデザイナー・ベビーに会つたのは初めてだった。というより、それをカミングアウトする人に、初めて出会つた、ということだった。

上流階級の1%くらいは、能力向上のために、胎児期に何らかの遺伝子操作を受けている、という統計があるらしい。それについては怜も聞いたことがあった。

「音楽好きの両親の希望で、特に音楽の才能が伸びるようにな、音感とか時間感覚がアップするようにしてくれてるの。それから、指も長くて器用になるよ」

もしかしたら、絵美がここで自分の秘密を明かしたのは、決して自慢ではなく、自分を偽りたくない、という、彼女なりの誠実さなのかもしれない、と怜は思った。怜が、自分が下層階級であることを他人に告げたがると同じように・・・。

絵美は、そんな怜の共感を察したかのように、隣から座席の距離をつめて、怜に肩をつけてきた。そして、怜の右手首を取ると、その手のひらに、自分の左の手のひらを重ねてきた。

「ほら、私、身長の割には、指が長めにできるでしょ?」絵美が怜に訊いてきた。

怜はドキッとした。そして、ことの外ドキッとしたことと、自分

自身驚いた。

「でもやつぱり、男の人の方が、手は大きいよね……」絵美は何も返答できない怜がつくつた間を自分の言葉で埋めて、重ねた手を引っ込めた。

怜は、向かい側の依緒の方を一瞥した。無表情に怜を見つめるその目と一瞬視線が合つたが、依緒はサッと目をそらして、にこやかな顔をつくつた。

「ホントだ、ホント、絵美ちゃんつて指キレイだよねー」そう叫うと、今度は隣の莊太の方を向いた。

「莊太君は？」依緒はまた、無口な莊太を促した。

「僕は・・・・・」莊太はつぶやいた。「ドラム以外、他のことは何もしないし、できないから・・・・・」

それは、怜も同じ気持ちだった。怜もまた、あらゆることを犠牲にして音楽に打ち込んできた。莊太のその一言で、無口な彼との精神的な距離が縮まつたように感じられた。

「多川さんはギターだつてオレよりうまいんだよ」怜が言った。

「いや、そんなことないけど」鋼は謙遜した。「今まで音楽一筋つてわけでもなくて、サッカーとか写真とか、いろんなことにチャレンジしてきたけど、音楽が一番楽しかったから続いたのかな。もちろん、練習も十代の頃はハードにやつたよ」

鋼は何かを思い出したのか、顔を少し曇らせた。

「でも、今の時代、演奏のうまさって、特に必要ないよ。だつて最近のロックやポップスは、プレイのテクニックなんて誰も問題にしてないじゃないか。素晴らしい演奏と、一セモノの演奏の違いを、評論家も見分けられないんだ。」

マスター・フェイスにいた時は、ライブで『当てぶり』ばっかりやらされた。アンプからは前もってレコーディングした音が出ていて、ステージにいるオレは弾いているフリ。今ではそれが、トッププロ

の世界では当たり前なんだ。それが、完成度の高いライブをやる最適な方法、ってことになつてるんだよ」

それは、プロの間では、公然の秘密だつた。

「このバンドでは、何でも遠慮なく弾きまくつていいいんだよ」依緒は冗談ぽく言つた。「でも、ミストーンは遠慮ぎみに弾いて下さいね」

（表面をきれいに取り繕うために、生演奏が否定されつつある世界。そして、生まれつきの才能ですら、お金で買うことができる時代。自分にとつて、ライブで演奏する意味とは、何なんだろうか？）

（自分なりの誠実さを示す以外に、他に何ができるだらうか？）

怜はやがて、それを考へても無駄だと気づいた。

ライブの前夜、怜は興奮で眠れなかつた。

当日、怜はややボーッとした頭で、阿佐ヶ谷のライブハウスに到着した。

その店は、広さはイエローアウルがよくプレイしていた新宿の店より一回り大きめだが、全員立ち見ではなくテーブル席中心のため、カウンター席を合わせても50人くらいのキャパだった。

三組のブッキングライブのトリだつたが、他のバンド田当ての客が残つてくれていた他に、熱心なマスター・フェイスのファンも、久しぶりに鋼のベースプレイを觀られるということで大勢集まつて、客席側の後方にかなりの立ち見客がいた。

そして、ほんの数人ではあつたが、イエローアウルのファンも、脱退後の怜のウワサを聞きつけて駆けつけていた。

二組のバンドの演奏が終わり、怜達のバンド、フロッグスの出番がやつて來た。

ステージ中央に立つた怜。

ボーカルバンドをしていた時には、サイドマン、という立ち位置にいた怜も今は、実質的にバンドの中心にいた。その緊張感、責任感は、イエロー・アウルの時のそれの比ではなかつた。

今まで自分がどれほど、津山という華のあるフロントマンに頼つてやつてきたか、とこゝにことを、怜はここにイヤといつほどの思い知らされた。

莊太の豪快なフィルインを合図に、一曲目がスタートした。

流麗なテーマのメロディを奏でる怜のギター、そして、それにぴつたりとユニゾンする絵美のシンセリード。

鋼のベースと莊太のドラムは、メカニカルに、豊富な手数でリズムパターンを構築していた。

怜の即興パートが始まった。

愛用のファズが生み出す、空想上の動物の鳴き声のようなチョーキング、続いて畳み掛けるような速弾き。

熱く照りつけるステージのライト、イエロー・アウルでの最後の演奏以来の、久しづびりの感覚だつた。早くも汗がにじみ始める。

その熱い皮膚感覚の向こう側にある、観客の温度。
それは、ことの外、冷ややかだつた。

一曲終えた時点で、客の数は半減していたようだつた。

確かに、フロッグスの音楽は、歌がないインストゥルメンタルであり、パンキッシュなマスター・フェイスとも、1960年代モツズ的なイエロー・アウルともまったく違つた音楽性だつた。

そして、2030年代の音楽シーンの流行からも、全くかけ離れ

たものだったのだ。

観客が期待していたものとは、かなりのズレがあったことは否めないだろう。

「どうもありがとうございました、僕らは今日が初ライブになる、フロッシュグスです。えー次の曲は・・・・・」

考えていたよりも短くMCを終えると、怜は曲を進めていった。そして、曲が終わるごとに、客が数人ずつ帰っていくのを見ながら、ライブは進行していった。演奏へのモチベーションを保つのに必死になりながら・・・・・。

最後の曲が終わった時には、ほとんど観客はいなくなっていた。終電が近いという時間でもなかつた。多くは自発的に、この場を去つたのだろう。

怜のリーダーバンドの、初ライブが終了した。

楽屋に戻つた四人は、静かだつた。莊太は汗びっしょりでソファーにどつと座り込み、ため息をついてふんぞり返つた。

鋼は、丁寧にベースをクロスで磨き始めた。

絵美は、手早く帰り支度を始めていた。

そして怜は、パイプ椅子に腰掛けると、頭を抱えた。

「じめん。マスター、フェイスのファンの子達を裏切るようなことしちゃつて・・・・・

「何言つてんだよ」鋼は、怜の肩をポンと叩いた。

そこへ、子どものような泣き声を上げながら、依緒が入ってきた。依緒の隣にはアイオンレコードの秋佳も来ていて、彼女の肩に手をおいてなだめていた。

「お疲れさん」秋佳は穏やかに笑つた。

怜は、依緒の嗚咽に突き刺さるような罪悪感を感じていた。

「秋佳さん、それから……」怜は震えていた。「依緒……」

今日は本当に悪かった

「それと、今までいろいろ助けてくれて、ありがとう。すこくいい経験ができたよ」

皆が怜の方に向き直った。

「やっぱり、このオレがバンドを引っ張つていくなんて、無理があつたんだよ。オレにはそもそも、人を楽しませる力がないんだ……

・・・もひ、やめよう」

「違う・・・・・違うよー」依緒は首を横に振り乱しながら、必死で涙声を発した。

「違うよ・・・・・私、こんなにすうじい『イディア』を感じたのは、初めてだよ・・・・・」

依緒は、くしゃくしゃな泣き顔の中にも、恍惚とした表情を見せていた。

「少し落ち着こう、依緒」彼女の横にいた秋佳が小声で言った。

「秋佳さんも聴いたでしょ？ 聽いたんでしょ？」依緒は秋佳に囁みつくように言った。

「音が、ひとつひとつの音が、光に包まれているようだった……」

秋佳は黙っていた。他の四人には、依緒に何があったのか、理解できるはずもなかった。

赤く腫らした眼で怜を見つめると、依緒は言い放った。

「怜くんには……」彼女の眼力は、怜を凍りつかせた。

「怜くんには何があつても絶対に、音楽を辞めさせないからー」

依緒が両親と顔を合わせるのは一ヶ月ぶり、弟の勇とは二ヶ月ぶりだった。

そして、家族四人での外食というのは、さらに久しぶりだった。ホテルの上層階のレストラン、窓際の席だった。2033年の東京の臨海夜景は、数十年前と比べると、さらに明るく壯麗であることは間違いない。

そのホテルのちょうど向かい側に、木乃内楽器本社の高い自社ビルがそびえ立っていた。テーブルを挟んで依緒の向かい側にいる、父、木乃内誠一の会社である。

「依緒は、仕事の方は順調なのか？」父が尋ねた。

「うん、まあ。いろいろ大変なこともあるけど」

父は、弟の勇には仕事のことは聞かなかつた。勇は、誠一の会社である木乃内楽器で、鍵盤楽器のデモ演奏の仕事をして働いていたので、彼の仕事ぶりは誠一には日々わかつているのだ。

「秋佳さんに、ご迷惑かけてきやいいけど」母が心配した。

「最近、新しい仕事が始まって、わかんないことばっかりだから、秋佳さんにはだいぶ助けられてる」

「ところで」依緒は思い出したように言った。「お父さんは秋佳さんと、昔から知り合いなんでしょう？ 今までも聞いてはたけど、もっと詳しく知りたいな」

「いいけどな」父は一息ついた。「その話をすると、どうしても親父に対しての悪口が出てしまいそうだな」

「えー、悪口つて何よ」依緒は口を尖らせた。「おじいちゃんのこど、嫌いだったの？」

「いやいや、いい父親だったし、その職人気質は尊敬していた。ただ、木乃内楽器の経営については、いろいろなことがあってな」

「ふうん……」依緒はフォークを口に入れながら、氣のない相づちを打つた。

「依緒は小さい頃おじいちゃん子だったから、話しくいところもあつたんだ。でももう、お前も大人なんだし、いいだろ?」

「おじいちゃんは、ヴァイオリンつくってたんでしょう? 私がいた頃には、もうあまりやつてなかつたみたいだけど」依緒は訊いた。「依緒が生まれた頃には、会社の経営で手一杯だつたはずだからな。お前のおじいちゃんは、ヴァイオリン職人としては確かな腕を持つていたが、金勘定についてはまったくダメだつた。経営面では、当時部下だった秋佳さんから、かなり助けられていた。若い頃の父さんも、秋佳さんから経営のイロハを学んだんだ。

おじいちゃんは、自分が気に入つたお客様には、採算を考えずに値切りして楽器を売つてしまつたり、時には金のない若者にタダで楽器をあげてしまうことも度々あつた。それを気分屋のような感じでやつていたから、秋佳さんも振り回されていたんじゃないかな」「でもおじいちゃんは、たくさんの人から愛されていたと思う。いろんなミコージシャンがおじいちゃんを慕つて遊びに来ていたよね。私も小さい頃、その演奏を聴いてた記憶があるもん」依緒は祖父をフォローしようとした。

「ただな、実はおじいちゃんは、外国の得体の知れない団体に加盟していた。簡単に言つと、才能のある音楽家を、独特の方法で支援するのが目的らしい。」

その独特的の、というのが問題でな。奨学金制度のようなものじゃなく、やり方がいい加減だつたようなんだ。

それで、その団体は確かにぶれてしまつたようだが、その後もおじいちゃんは自腹で相変わらず勝手な支援を続けた。一時はそれで、木乃内楽器も傾きかけたくらいだつたんだ

「……」依緒は黙つていた。

「秋佳さんが中心になつて、会社は立て直すことができたが、その

後、父さんにすべてを受け継ぎして、会社をやめてしまった。おじいちゃんのやり方に、さすがに嫌気がさしたんじゃないかな、わからぬのが

「…………それは、どうかな…………？」依緒は口ごもった。

「海外から帰つて来た秋佳さんに十数年ぶりに会つて……父さんは実を言つと、不安だった。

以前より老けた秋佳さんの表情が、死んだ親父と重なつて見えたんだ。

楽器ではなく、レコード会社をやる、といつのも意外だった。しかも、抱えてるアーティストは正直に言つて、お世辞にも売れそうではないじゃないか

「お父さん！ 悪いわよ」母が制した。

「もちろん、秋佳さんは信用しているし、父さんにとっては恩人もある。追々いつしょに仕事もしたいと、時々連絡もとつている。アイオൺレコードのアーティストに、うちの楽器を使つてもらいたいからな。

そして、お前が秋佳さんに賛同して、その仕事に着いているのもわかる。しかしながら、父さんはちょっとイヤな予感もするんだ

「お父さん、食事が進んでないわよ」母が、話に夢中の父に言つた。父の前に出された二皿目の前菜が、ほぼ手つかずになつていた。

「第一皿」同じ皿をすでに平らげてしまつた勇が、続けて話し始めた。「今の音楽シーンって、インディーズとか、マイナーレベルが入つてくる余地なんて、ほとんどないんだよ。音楽をリリースして儲けが出せるのは、五つくらいのメジャーなレコード会社とその関連会社だけだつて。

ここだけの話、ポップスの人気は、そういうメジャーのお偉いさんたちに操作されてるんだ。みんな、つくられた人気なんだよ。

毎週のヒットチャートは、誰々を1位にしよう、誰々を2位にしようつて、エラい人たちが決めていつて、それをそのまま発表するのさ。

するとどうなると思う？ 現実の売れ行きも、次の週には、ほとんどその通りになつていくんだよ。

何でかつて・・・・何がいい音楽なのか、自分がどんな音楽が好きなのか、それを自分で決めることができる人が、どんどん少なくなつてきているからだよ。

有名だから、評判がいいから、だから買うんだ。自分で決められないから、ヒットチャートに決めてもらつてることや。そんな状況で、後から参入してきた会社に、勝ち田なんかないだろ？ いくら秋佳さんが優秀な経営者でもさ。勇のこゝれといふ時の話しの勢いは、たゞがに母も抑えることができないでいた。

「あと、つい最近、面白いウワサを聞いたよ、エンペリアル社が、音源の中に洗脳情報を入れて・・・・」

「勇、もうやめるんだ」耐えかねた父が鋭く言つた。

「業界のタブーってものをわきまえなさい。それができっこそ大人だ。特にこゝり、誰が話を聞いているかわからん場所ではな」勇は口を引き締めるように閉じて、つなづいたが、またすぐ依緒の方を見て言つた。

「まあ、オレも姉ちゃんや秋佳さんが、純粹に音楽が好きだつているのはわかるよ。だから姉ちゃんのやることに、反対はしてない」「もういい」依緒はあからさまにムッとしてみせた。「父さんも勇も、音楽を仕事にして、普段どれくらい、心から音楽に感動してるので？」

ふたりとも何も答えられなかつた。

「私は毎日のように感動してるよ、強がりなんかじゃないし。後は、この気持ちを他の人にも伝えていけばいいだけのことじょう？」私は必ずやってみせるから」

そう言つと依緒はふくれながら、丑れたばかりのアンハウのボフレを勢いよく食べ始めた。

「やうよ、依緒ならきっとできるわよ」母が言つた。「お父さんも

勇も、みんな応援してるんだから」「

「もちろんだ」父は依緒をなだめにかかつた。「依緒がマネージャーをしてるバンド、何ていう名前だ？ 多川君はマスター・フェイスの頃からうひのベースを愛用していると思うが、他の子達にも、良かったらエンドース契約を勧めておきなさい。木乃内の系列ブランドの楽器をタダであげられるから」

エンドース契約とは、楽器メーカーが製品の宣伝のために、有名アーティストに楽器を無償で提供する契約のことである。通常、フロッギスのような無名バンドには無縁のことだ。

「本当？ お父さん、ありがとう！」依緒は急に満面の笑みになつた。
「親父はいつも姉ちゃんには甘いよな～」今度は勇がふて腐れ始めた。

怜は渋谷のビルの高層階にある、アイオンレコード東京の事務所に初めて来ていた。

ライブ後、初めてのバンドミーティングのためだ。

そこここに西欧風の置物や花瓶が見られるのが印象的な意外は、普通の事務所と変わりはなかつた。代表の秋山と数名のスタッフがいて、営業やスカウトで外を回つている人たちを合わせても全員で10名に満たないそつだ。

怜はまた、約束の時間より一時間ほど早く来ていた。代表の秋佳と話をするためだつた。どうしても訊いておきたいことがあつたらだ。

「依緒は、もう大丈夫なんですか？ ライブ以降、ここ数日は連絡とつてないんですけど」

「ああ、もちろん、あの後すぐに落ち着いたよ。心配ない」

応接室のテーブルの向かい側に座つているのは、秋佳だつた。

「あの口は、だいぶ気性が激しいところがあるのは気づいてました。でも、あの時はかなり変でした。バンドのメンバーも心配してましたよ」

怜は、その原因も知りたくて、話がしたかつたのだつた。

「僕は、何年もバンド活動してきて、それなりに音楽業界のことを、人づてに話を聞いてきます。だから・・・・・」

怜は言葉を選んだ。

「アイオンレコードが、他のレーベルとはかなり違つ会社だな、つていうのは感じています。契約した時の状況がよくなかったのもあるけど、この会社のことについて、もっと詳しく教えていただけま

せんか？」

「そうだな、依緒が至らなくて、説明不足になつていたところもあると思うが」秋佳は詫びるよう大きくなづいた。「実は私も、迷いながらやつていたんだ。我々が抱えていることを、君にどこまで伝えるのが適切なのか」

「僕の頭で理解できるところまで、全部知りたいです。なぜ、こんなに平凡な僕が選ばれることになつたのかも」

秋佳は首を横に振つた。「我々の目からすると、君は決して凡庸ではない。我々には、音楽家の才能を見出すための方法があつて、それに基づいて言つているのだから、間違いはない。それは大昔から継承されてきている、独自の方法なのだ」

「・・・・大昔つて、アイオンレコードは新しい会社でしょ？」「アイオンレコードは、ある団体の資本によつて設立された。

驚かないでほしい、その団体とは、イディアーハウス協会というもので、その起源は中世ヨーロッパとも、有史以前とも言われているのだ」「

チュウセイ？ ユウシ？ 怜は混乱した。

「イディアーハウス？ それはどんな協会ですか？」

カルトか何かと関係あるかもしない・・・・と忠告してくれた、クラリネットの西沢の言葉が思い出された。

「その成り立ちについて話そう。ここからは、驚くな、と言つても無理だろう。

イディアーハウス協会は、中世ヨーロッパの吟遊詩人たちの旅を経済的・物質的に支援する、楽器職人ギルドや有志の大商人、貴族たちによつてつくられたのだ」

吟遊詩人・・・・リュートなどを弾き語りしながら、各地を放浪して回つた音楽家たちのことか。いつたい何百年前の話なんだろう？ 怜にはわからなかつた。

秋佳は話を続けた。

「その団体はやがて、才能に恵まれながら不遇な生活を送る芸術家・

音楽家を助ける組織へと変貌していった。

それに伴つて、彼らはより秘密裏に活動するようになつていった。協会員たちは、当時興隆した鍊金術などの影響もあって、信じるようになつていったのだ。靈感を受けて作曲され、または演奏された音楽は、不可視の特別なエネルギーを放出し、人々に神からの至福をもたらすと。

太古の音楽には、そのような力が充分にあつたのだ。人々を癒し、鼓舞し、全人的な進化へと導く、呪術的なパワーだ。中世の時代には、それがすでに失われつつあった。

中世社会の差別、偏見、間違った信仰心によつて、音楽が秘める神性は、文化からないがしろにされていた。

だから、音楽を通じて、超自然的な力を再び取り戻そうとするその思想は、ある程度までは、的を得たものだつたのだ

怜は呆然として、言葉も出なかつた。怜は、込み入つた話になるだろうと覚悟を固めてこの事務所へやつて来ていた。

しかし、秋佳が語るその壮大なストーリーは、怜の想像をはるかに超える、茫漠極まりないものだつた。その話の真偽を疑うかどうか、といった次元の混乱ではなかつた。

「もうすでに、私の話を受け止めきれなくなつてゐるだろう?」秋佳は、怜の心情を察していた。

「それなら別の角度から話そう。学校の音楽の教科書に載つているような偉大な作曲家たち、その中には、生前は無名だつたが死後に評価された者や、食うや食わずで生活していた頃があつた者が、何人もいることを知つてゐるか?」

「・・・い、いえ

彼は、壁にかけられた、たくさんの作曲家の小さな肖像画の中から、ふたりの男を指で指し示した。

「幼くして『神童』と讃えられた、ウェーベン古典派を代表する人物。後に『歌曲の王』として知られるようになる、ロマン主義の幕を

開けた人物。

彼らは作曲による収入を得られない不遇の時期に、友人たちから借金をしたり、無償でいろいろと奉仕させたりして生きていた、と伝えられている。五線譜を買つお金すら、自分で稼げなかつた。

すでに意図的に、あらゆる記録からは抹消されているが、実は彼らは、イディアーノ守護協会からの金銭や物資、そして精神的なケアや音楽上のアドバイスを受けていたのだ

「……まさか」怜は、誰もが知つてゐるその偉大な作曲家たちの逸話に驚愕した。

「ヨーロッパ音楽だけではない。時代を経て、アメリカ音楽の歴史の分岐点となるべき者たちも、我々協会の支援の対象となつた。

例えば、悪魔に魂を売つてギター・テクニックを手にした、とウワサされた伝説のブルースマン。それから……

それまでヘタクソ、とさえ酷評されながらも、ある一ヶ月で突然啓示を受けたかのように神がかつた演奏を始めた、モダンジャズのテナーサックス奏者。

そして君も知つてゐるだらう、60年代後半のたつた3年ほどの活動で、後世に語り継がれる、あのロックギタープレイヤー。彼にも、ギターを売つてお金に換えることを考へるほどの、貧しい時代があつたのだ

「その協会が、彼にまで関わつていたなんて……」

「と、そう思うだらう？ 無理もない。

協会がお金を貸して支援したアーティストたちは、自分たちの私物を協会に渡すことで、義理を果たそうとする者たちが多かつた。この部屋には、彼らの、今となつてはお金に換えられないほど貴重な品々がたくさん残されている。それが数ある証拠のひとつだ。もし興味があるなら後でじっくりと見て行くといい

部屋の側面全体に置かれたガラス張りの大きなケースには、偉大な作曲家たちの遺品と思われるものが数多く展示されていた。

リュート、ギターなどの楽器類、いつの時代かもわからぬほど

古い衣服、協会とやりとりしたたくさんの書簡など・・・いくつかのものには、サインもしてあった。二十世紀の欧米の著名アーティストの写真も、大量にあった。

「でも彼らは、誰でも知っている有名なミュージシャンだけど、協会のことは誰にも知られていないじゃないですか。いつたい何のために、彼らを助けているんですか？」

ガラス棚から秋佳の方へ向き直つて、怜が訊いた。

「協会は、発足当時の有志たちが寄付した資本を、安全な投資によって増やし、維持し続けている。協会の目的は、真に価値のある、普遍的な美を持つ音楽の保護、育成にある。ビジネスのためでも、名誉や権力の拡大のためでもない。」

そして、彼らが不遇の時代を過ぎた時、世に出ぬまま消えて行く心配がなくなった時点で、協会も彼らの元を去る、それが原則なのだ。芸術家に他人が干渉しそぎないこと、それが、真に価値がある芸術を生み出す上で、欠かせないことだからだ」

その時、怜は息を荒げた。

「それなら、その『真に価値がある』と言える『価値』の基準はなんですか？」

この世は結局、強い者が生き残るし、弱い者は消えていきます。そして、強いことが価値なのではないですか？ 僕はそう思つてました」怜は思い切つて反論した。

秋佳も、怜の弁が立つところには、少し関心した様子だった。

「そうかそれなら、ここにいるアーティストたち・・・別の可能性を持つた世界でなら、協会の介入なしでは、決して世に知られることはなかつたはずの彼らは、結局いてもいなくても、どちらもいい存在だったというのか、君は？」

怜は、その言葉でいつぺんに何も言えなくなつた。

(それら偉大な作曲家がひとりでもいなかつたら、彼らが後世に影響を与えることがなかつたら、現代の音楽はまったく違つたものにな

なっていたかもしれない。

まして、ここに肖像画のある、名立たる音楽家全員が存在しなかつたとしたら……世界の音楽文化は、どこまで衰退してしまつていたかわからない……）

「ハツハツ、いや、それはいい質問なんだがな」秋佳が笑った。
怜は考えをまとめるのに必死だつた。

「そういえばまだ、私と依緒の話をしてなかつたな。君が訊きたかつたのは、そつちの方だろう?..」

「はい」怜はうなづいた。

「私と依緒は、イデイア－守護協会の一員だ。私は、依緒の祖父に当たる、木乃内昌夫から協会員の資格を『えられた』
「依緒の、おじいちゃんから?..」

「そうだ。彼は木乃内楽器の創業者、社長でもある。彼は自分の会社の楽器、特に自分の手でつくつたヴァイオリンを、才能を見込んだ若者に、低額で提供していた。タダであげてしまうこともあつた。私は元々、木乃内楽器に勤めていた。そして、部下の中でただ一人、協会の秘密を社長から明かされた。

そして、音楽の意義、普遍性について学んだ。そして真に価値ある芸術を見定める方法を、時間をかけて受け継いだ。

いや、情けないことに、その時は、受け継いだと思い込んでいたんだ。

実際には、超自然的な価値を持つ音楽を見極める術は、二十世紀後半辺りから、一部の協会員の間で曲解が起こり、正しく継承されなくなつていたのだ。そして、世の中から後世に残る価値のある音楽自体が、急激に減少し続けてもいた。

そして、それが原因で協会員たちは、勝手な判断でアーティストたちを発掘することが多くなつていつた。やがて、意見の食い違う者同士が協会の中で派閥を形成し、対立するようになつた。

木乃内社長と私の、音楽家支援の活動もまた、独りよがりな偽善

になりがちだつた、少なくとも私は、そう反省している。

協会が壊滅的な打撃を受けるのは、そんな中だつた。間違つた継承をしていた方の派閥が、協会の資金を勝手にリスクの高い投資に使つたために、ほぼ損失させてしまつたのだ。協会は、存続すら危うい状況に追いつめられたのだ。

その後も、木乃内社長は自費で音楽家支援を行なつたが、それは決して実りのあるものにはならなかつた。

その一方で、世界の音楽界は、急速にビッグビジネスへと成長を遂げ、金をどれだけ生み出せるかが、音楽の価値の唯一の尺度となつていつた。

私は協会の幹部から、協会の再建のために、そして全会員に正しい継承が行われるように改善するために、ウイーンへ来て力を貸してほしい、と頼まれた。

私には木乃内楽器のことも大切だつた。しかし、木乃内社長自身も協会再建を切望していた。そこで悩んだ末に木乃内楽器を退職して、協会で働くため、そして私自身の審美眼を改善するために、ウイーンへ渡つた

「それで、依緒はどうやって協会員に？」怜は訊いた。

「幼い依緒のことは、私が木乃内楽器の社員だつた頃からよく知っていた。依緒は、彼女から見て祖父に当たる木乃内社長が、とても好きだつたようだ。社長が関わっていた音楽家たちの演奏を、子どもらしからぬ集中力で聴いている姿が印象に残つている。

社長は、依緒のことを、我々より音楽の神性を見抜く力を、生まれつき持つていそうだ、と度々言つていた。

私がウイーンから十何年ぶりに日本に帰つて来てすぐ、依緒は私に会いに來た。彼女は當時、音楽大学の学生で、作曲を専攻していた。事情はよくはわからなかつたが、日本の音楽界の状況に失望しているようだつた。自分の作曲の才能にも、限界を感じていたらし

怜は、同じ大学にいた西沢の話を思い出した。「やっぱり依緒は作曲科に・・・学校で、あまりうまくいってなかつたんですか?」「詳しく述べわからないが、その時期に、音楽に関連した不思議な体験をすることが多かつたらしい。彼女は、あらゆるコンクールについて、それが始まる前から誰が入賞するのか、ほぼ間違いなく予見することができた。予見したことを、つい何回か親友たちに話してしまつたところ、いろいろと怪しまれて関係がこじれてしまつたことがあつたようだ。すでにその頃から、協会員としての並外れた才能があつたということなんだろう?」「うう」

依緒が音楽について語るときに見せる絶対的な自信。その理由の一端を、怜は知った気がした。

「話を元に戻すが・・・私は、協会が再建され、新しい才能を発掘するためにレベルを立ち上げることを依緒に話した。表向きにレコード会社、というかたちをとつて活動することは、協会の歴史の中ではもちろん、初めての試みだった。

彼女はそれに興味を示した。協会員の能力を獲得するためにワインへ行きたい、と言い出したのだ。

私は、大学を卒業することを前提に、進路について考え直しなさい、と忠告した。彼女の両親が猛反対することは、目に見えていたからだ。しかし、依緒は私のいうことを聞かなかつた。協会のことには両親に内緒にしたまま、語学留学か何かの名目で、大学を中退してワイン本部へ行つてしまつたのだ

「やっぱり、依緒つて、そういう『なんだ』怜は乾いた笑い方をした。

「まあな。しかしすべては、彼女の音楽への純粋な愛から来るものなんだ。

木乃内社長が生前言つていた通り、彼女はワインの要請機関で、素晴らしい才能を發揮したようだつた。そして、通常の十分の一以下の期間である、わずか半年あまりで協会員の資格を手にして、日本へ戻つて來た。

そして、今に至つてゐるのだ

ひとしきり説明を終えた秋佳は、少し疲れたようだときく一息ついて、お茶を口に含んだ。

しかし、これだけ訊いてもまだ、怜の中には、じつのように残る何かがあった。

「そもそも、世の中には、数えきれないほどたくさんのアーティストがいますよ。そんな中から秋佳さんたちは、どうやって後世に残る価値があるアーティストを発掘しているんですか？ この僕は、いつたいどうして選ばれたなんですか？」

秋佳は、少し間を置いた。

「・・・・・その答えは、依緒が先日、口にしていた『イディア』にある」

秋佳は、言葉を選んでいよいよだつた。

「・・・・・『イディア』については、秘術の内容に関わることなので、今どこまで怜君に説明すべきかは、迷うところなんだ。それを知り過ぎてしまつことで、君の作曲に悪い影響を与えてしまう可能性が、ないとも言えないからだ」

「悪い影響つて・・・？」怜にはわからなかつた。

「つくり出す役割と、つくられたものを評価する役割は、別の人間がしなければいけない、ということだ。うーん、そんなことを言っても、余計混乱させてしまつな」

秋佳は身を乗り出した。

「とにかく、君にとつて一番大事なことは、流行や他人の意見に捕われず、君の心の内側から湧き出でくるものをうまくつかまえて、音楽として表現することだ。それが、世の中にとつてどんな価値を持つものであるのか、などと迷つてはいけない。

迷わないということは、とても難しい。我々は特にそれが難しい時代に生きているんだ」

「でも・・・・・まだ釈然としない怜は、言葉を練つていた。

そこで秋佳は、さらに付け加えた。

「今まで協会が支援してきた偉大なアーティストは、自分自身の才能に対して、みな自覺的だつた。彼らはどんな状況にあっても、自分たちの音楽の才能は、神から与えられたものだと信じきついていた。君は自分を信じていない。だから君は、君を信じて手を差し伸べた私たちも信じられず、私たちは弁明すべきことが余計に増えていく。それが新たな問題を生み出しているのだ」

そのとき、部屋のドアが開いた。
現れたのは依緒だつた。

「怜クン！ 早いね」 依緒は少し驚いた表情を見せた。

「怜君は、私と話があつて早めに来ていたんだ」 秋佳が言った。

「君たちはそろそろミーティングの時間だろう？ 私もこれから協会の定期会議があるので、もう行かねばならない」

秋佳は、応接室を出ると、奥の社長室らしき部屋へと入つていった。

ギター、ベース、ドラムが一体化した、シンプルで激しいロックのインストロが爆音で始まった。

ムービングスポットの光は幾筋も広いステージを駆け巡り、やがて中央に収束した。その光の中心に立っているのは、ボーカルの津山だった。

イエロー・アウルのデビューライブ、その会場は、ロックの殿堂とも言われる一万人収容のホール。客席は満員だった。

津山の放つシャウトがガソリンとなって、観客は荒れ狂う火柱のような歓声を上げた。

ギターの吉沢とベースの水谷は、巨大なステージセットを歩きまわりながら、パワフルなプレイで津山を支えていた。

盛り上がる曲展開に合わせて、ステージ奥のスクリーンの「」の映像が目まぐるしく変わっていき、観る者を飽きさせなかつた。すべての演出が超一級のエンターテインメントショーだった。

「デビューライブでこの規模はすごいね！ カッコいい！」絵美はアイオンレコードのミーティングルームに置かれたテレビの画面に見入っていた。

部屋にはフロッグスのメンバーが勢揃いしていた。このメンバーと依緒を含めた5人全員が顔をそろえるのは、先月の初ライブ以来だつた。

「これ、例の、怜が元々いたバンドなんだ」隣の鋼が言った。

「えっ？ ……ああ……」絵美は、褒め過ぎてしまつたことにちょっと後悔した。怜がメンバーの裏切りを経験していたことは聞いていたのだ。

「チャンネル変えようか？」莊太がリモコンに手を伸ばした。彼が

そういう気の利かせ方をすることは非常に珍しかつた。

「いいんだ」怜が無表情に言った。「もうすぐ依緒の電話も終わるだろうし、ミーティングを始める時にヴォリュームだけ下げてくれれば」

怜のお気に入りだった、例のバラードが始まった。そのイントロには、新加入のギターリストである吉沢なりの弾き方が加わっているものの、確実に怜のアレンジの個性とアイディアが残っていた。その幻想的な響きが、怜の胸に突き刺さった。

通常、アレンジには著作権は存在しない。怜が作曲のクレジットに名を連ねていない以上、もう彼とは何の関わりもないことなのだ。

（それにして、つい数ヶ月前まで、立ち見で150人のキャバのライブハウスで演奏していたあいつらが、どうやってこの短期間で一万人のファンを集めることができたのか？）

怜にはまったくわからなかつた。

怜の自宅にテレビはなかつたので、イエローアウルがどれほど大々的にプロモーションを打つていたかは知らなかつた。この時代も無料放送のチャンネルはあつたが、それはあくまで中流以上のための情報源であり、下層階級の生活水準を考慮した内容の番組は、公営放送の中にはすら皆無だつたのだ。

今週の音楽情報番組はほとんど、イエローアウルの話題をトップに取り上げていた。その時の裏番組でも、彼らの衝撃的デビューを特集しているはずだつた。

この時の怜は、メジャー・レコードが人気を操作するしくみというものを、まだ理解していなかつた。

「はい・・・・はい・・・・そうですか・・・・どうしてもダメなんですね、わかりました」

依緒は通話を切つてから、力なくため息をついた。そして、ティ

ブルについたフロッグスのメンバーたちの方を振り返つた。

「最後の望みだつたライブハウスも、ダメだつて」依緒は、まいつ

た、というように首を振った。

フロッグスの次回以降のライブの予定を入れたいのだが、都内があらゆるお店から断られているのだった。今後のライブ日程は、未だ白紙だった。

「もしかしたら」 鐘が珍しく渋い顔をした。「オレが原因かもね」「どうして?」 依緒が訊いた。

「オレが所属していたエンペリアル社は、傘下にたくさんのライブハウスを経営してるし、それ以外の店も、たくさんのスカウトが新人発掘のために見て回ってる。スカウトがくる店は音楽ファンにも知られていて、それだけで店のステータスなんだ。

いいアーティストを自分のところへキープしておくために、店にいくらか支払っているって話も聞いた。多くの店はエンペリアル社に義理があるし、そうでなくとも嫌われるのはイヤなんじやないかな」

「つまり?」 怜はまだ意味がわからなかつた。

「オレが加入したバンドは店で出演させないように、って支持している可能性は十分にある。オレはエンペリアル社と仲違いして飛び出してきた人間だからね。あいつらは、一回自分たちのところを抜けていった奴に対して、まったく容赦がない。びっくりするくらいになわばり意識が強い会社なんだ」

怜は、音楽業界のトップの厳しさを淡々と話す鐘を、感心して見ていた。

鐘は怜に言った。

「でもそういう怖さは、怜がイエローアウルにいたときに声をかけてきた、ウルティマレコードも負けてない、と思うよ。

元イエローアウルのメンバーって触込みで、バンドを売名で売り出すことは絶対に許さないはずだよ、オレの方にそのつもりがなぐくてもね」

怜は、原因の一端が自分にあるかもしれないことに気づいて、うなだれた。

「後は、ストリートでできるところがないが、調べてみるよ。とにかく今はどんな環境でも経験を積まないとね」依緒が言った。

「それから、レコードティングの準備も始めてしまおう」

怜はリーダーらしく意見を言わなければいけない、と思った。

「ぜひ、他のメンバーにも曲を書いてもらつて、アルバムに収録したいんだ。お願ひできるかな?」

鋼と絵美はうなづいた。

「莊太にも、リズム的なアイディアを出してほしい、まず一曲共作しよう」

莊太も自信なさげに首を縦に振つた。

「私たちも、イエローアウルに負けないように、がんばりましょー！」

そういう絵美の言葉は、どうしても怜には意地悪な冗談に聞こえてしまつた。自分のバンドは、とてもこんな人気グループと張り合えるような状況ではない、そう思わずにはいられなかつたのだ。でも、絵美が何を言つても、怜には憎めなかつた。

「そうね。絶対負けないよ！」依緒は調子外れなくらい真剣な顔で受け答えた。

「絶対、負けてないよ。だつて・・・・・」

テレビには、ちょうど一曲を演奏し終えたイエローアウルの姿があつた。

「だつて・・・・・」のバンドはもつ・・・・・依緒はそこで言葉を飲み込んだ。

(もう、イエローアウルからは、以前ほどには『イデイア』が伝わつてこない)

秋佳は、アイオンレコード東京事務所の奥の間にいた。中世ヨーロッパに確立された植物的な装飾が、床から壁、天井に至るまで

全体に施されたその部屋の中央に、遠距離会議用の巨大なディスプレイが置かれていた。

ディスプレイの向こう側には、イディアーラー保護協会のウイーン本部、メンフィス支部の幹部の面々が、奥行きのある立体映像で移されている。

秋佳はそのモニターと向かい合い、すでに始まっている活動報告に耳を傾けていた。

イディアーラー保護協会の公用語は、ラテン語、ギリシャ語、ゲール語などのヨーロッパ言語を元にした、独自の言葉が使用されていた。協会は、危機的状況から立ち直ってまもなく、伝統を正しく継承すること、同時に過去の過ちを修正し、時代に合った支援体制を確立することを、幹部たちは会議の中で模索していた。

「ボクシンは三人は、目下アフリカ北部をツアー中。平均客数は800で客足も好調、予想以上の反響を得ています。

彼らがツアーをした地域では、2、3日治安が良好になつてきていることが、派遣隊の独自調査から明らかになつてきました。これがその相関図です」

チユニジアに滞在中の、ボクシンのチーフマネージャーが説明していた。

「ついにあの三人から、音楽を直接耳にしていない人間にも影響を与えるレベルのイディアーラーが出始めた、ということになりますか」メンフィス支部長は感心した様子だった。ボクシンのマネージャーは大きくうなづきながら、続けて言った。

「ただし、フリー・コンサートも数多く実施しており、当初から採算見込みの薄い計画のため、経済面では引き続き協会からの支援の継続は必要です」

「それは致し方あるまいな。支給額については後に詰めよつ。彼らの無事と音楽的成長を祈つていてるぞ」協会長が言った。

「それでは次に、ジェフ・ラビンとルディの状況は?」ウイーン本

部長が進行した。

「海外でのすべてのコンサート日程を終了しまして、ジェフは今後一年をルディのヴァージョン・アップのための研究に費やしたい、と申しています。さらなる芸術性をルディに教え込ませたい、とのことです。

ただ、彼は来年度から、その能力を認められ、人工知能研究所の中核にある人工言語野のグループに加えられる予定です。そして孤軍奮闘してきた彼の即興演奏のプロジェクトは、予算を打ち切られる可能性もあるそうです。彼は平行してふたつの研究を継続させるため、密かにスポンサー集めも始めていますが・・・」

メンフィス支部長が説明した。

「協会からも研究費用はでき得る限り支援しよう。ルディは機械故に、人間と同様のレベルのイディアを発生できるわけではない。しかし、その存在が、今後も芸術・科学の両面で後世に大きな影響を与えるものであることは間違いない。引き続き、開発費などの経済的援助は必要だろう」協会長が言った。

「では、まだ活動を始めたばかりの、フロッギスについては？」

秋佳の説明し始めた。

「彼らは今後、ファーストアルバムのレコーディングに入る予定です。スタジオ代、エンジニア等の人権費など、レコーディング費用の支出はあります。それと最近になって、ライブ活動に支障をきたす存在が・・・」

「『抑圧者』か・・・やつかいだな」メンフィス支部長が渋い顔をした。

「私たちの予想以上に早く現れました。やはり日本は抑圧者の力が、特に強い国かと思います」

「フロッギスのメンバーには、日本のいわゆる下層階級者がひとりふたりいるだろう? その点についてはどうだ?」協会長が訊いた。

「長時間のアルバイトでどうにか生活を支えている者もあります。ライブによる報酬が見込めない現状、彼らが音楽に専念できるように、生活費の支給も検討していただければ、と存じます」それは兼ねてからの秋佳の希望だった。

「そうだな・・・それは懸案だったのだが・・・フロッグスは、一種のハングリーアーティストの性質を有している。故に、単に金銭を支給することが、彼らの芸術への支援になるかどうかは、東京という都市の文化性も踏まえつつ、慎重に考えなければならない。

過去に、協会が経済支援を過剰にやつてしまつたために、堕落してしまつたアーティストは数多くいたのだ」協会長が答えた。

「生かさず殺さず、と言つてゐるようになつてゐるかもしかんが、悪く思ひんでくれ。自分たちが抱えているアーティストに樂をさせてやりたい気持ちはわかる。しかしながら、例えば、秘境の先住民に、善かれと思つて家電製品を貯えてしまつたら、その民の文化が壊れてしまうのに似ている。

下層階級は、貧しいことそのものよりも、自分の人生において適切な金の使い方を学んでいない、ということが問題なのだ「ウイン本部長が、意見を述べた。

「もちろんです、ただ、アーティストの金銭管理はマネージャーも関与しますから・・・」秋佳が食い下がつた。

「そうだな、これも引き続き検討しよう。いずれにしても、彼らが楽器を取り上げられるようなことにはならないよう、引き続き注意してくれたまえ」協会長が指示した。

「はい」秋佳は多少のわだかまりを残しながらも、了解した。

ミーティングから約一ヶ月後、鋼が作曲した2曲、絵美の1曲、そして莊太と怜が共作した1曲が、怜のオリジナル5曲に加わり、フロッグスの最初のアルバムの収録楽曲がそろつた。

その後、レコーディングのリハーサルを兼ねたストリートでのラ

ライブが、駅周辺や大きな公園で何度も行われた。

観客からお金を取つて いるライブハウスでのライブのようなプレッシャーがない分、彼らは積極的に、いろいろな音楽的実験を重ねることができた。

はじめは、その独りよがりになりがちな演奏のためか、通りすがりの人々が足を止めることは稀だった。その代わりに、街路樹の木々に大量の野鳥がにわかに集まり始めた。四人のメンバーは一様に驚いたが、依緒だけは笑っていた。

やがて、バンドの連帯が高まるにつれ、人だかりができることも多くなつていった。

その中のごく少数の人たちが、彼らの流行にまったく追従しない、創造性にあふれたサウンドに驚嘆し、依緒が配るチラシに見入つていた。

天井のない場所に響き渡るギターの爆音に、怜は酔いしれた。

そして、ひとつのは機体のように連動する四人のサウンドに、限りない期待を抱いた。

（これが、オレの求めていた、この四人にしかできない音楽なんだ。これをそのままレコードティングしたら、本当に大変なアルバムができあがる・・・・・）

曲想がバンドの中で固まつてくると、フロッグスは都内のスタジオでレコードティングに入つていった。

アイオンレコードでは、アーティストの経験の程度に関わらず、セルフプロデュースが原則、という方針があるようだつた。そのため、アルバム制作のプロデュースとディレクションは、バンドリーダーである怜にゆだねられ、外部スタッフはエンジニアとそのアシスタントのみだつた。

当初、怜はその状況に強い不安を覚えたが、マスター フェイスで

プロデュースの経験がある鋼が、彼の強力な支えとなつた。またスタジオミクージシャンとしてレコーディング経験が最も豊富な絵美も、知識を与え、怜の意思決定をサポートした。

また怜は、新しいギターを手に入れていた。

鋼のベースと同じ木乃内楽器のオーダーメイド・ブランド『ドラゴンズロア』とエンドース契約をしたのだった。

まだ活動を始めたばかりで、宣伝力のないバンドが楽器のエンドース契約することなど、前例はなかつた。これは完全に依緒の口ネのおかげという他なかつた。

クラフトマンは怜の希望通り、弾きやすさ、機能性を重視した、手の負担が少ないモデルをつくりあげた。それは、ストラトをひとり小さくしたようなオリジナルモデルだつた。

怜は、初めて弾いた瞬間から手になじんできたこのギターに、とても満足していた。そして、弦の鳴りをクリアに引き出すその音が、愛用している手作りのファズの混沌としたサウンドと、とても相性が良かつた。

外見的には、カエルにちなんだ黄緑色の塗装が印象的だつた。

即興パートの多い楽曲、ライブ感を重視した演奏というテーマもあつて、録音は一気に進められた。

初リハーサルの時点で最高のプレイをしていたメンバーたちは、リーダーの怜も依緒も、終始文句のつけようがない奇跡的な演奏を当然のように見せてくれた。

そして、メンバー全員が納得のいく、わずか七日間のレコーディングが終了した。

録音をした音を調整・混合する、ミキシング作業の初日。エンジニアは、バスドラムの調整からスタートさせ、ズンズンという重低

音をコンソールルームに響かせた。室内後部のソファーには、怜と莊太が座つてその音に耳を傾けていた。

一人には、サウンドについてエンジニアに希望を伝える以外には、特にやるべきことはない状況だった。

依緒は室内に入つてきて、外に長く音が漏れないように、重いドアを急いで閉めた。

「今日は、絵美ちゃんと鋼くんは、用事があつて来られないって」依緒が、怜の耳元で言った。

「絵美ちゃんは他の仕事があるつて聞いてたけど、鋼も？」怜が聞き返した。

「鋼くんは急用みたい」

「なんだ」

怜は常々、有能なヨーロッジシャンである鋼が、一步引いた立ち位置から、リーダーである自分を助ける立場で、誠実に休みなくバンドに関わってくれていることを申し訳なく思っていた。

だから、彼にその時珍しく用事ができたといつて、特別、気にすることはなかったのだ。

鋼は、食パンとコーヒーとサブリで朝食をすませると、時計を見た。8時前だつた。

彼は、都内の2DKの立派なマンションに、三つ離れた妹の麻矢と二人暮らしだつた。

麻矢は、芸能事務所に所属するモデル兼歌手だつた。来年にはボーカルグループの一員として、メジャー・デビューするという話が決まりつつあつた。鋼が元所属していたバンド、マスター・フェイスと同じ、業界最大手のエンペリアルレコードからである。

麻矢はモデル業のかたわら、ボイストレーニングに通い、鋼以上に忙しい生活を送つっていた。

「おい、麻矢。今日は事務所行かなくてもいいのか？」

鋼は妹の部屋のドアに声をかけた。しかし、まったく返事はなかつた。

互いの忙しさのせいで、妹との会話が少なくなつてきているのを、鋼は気にかけ始めていた。

「おい、開けるぞ」

そういうと鋼は、ゆっくりとドアを開けた。室内は真っ暗だつた。妹の麻矢は、ベッドの上の布団に、頭から包まって寝ていた。

「お前、昨日の夜帰つてきてから寝たきりで、何も食べてないんじやないの？」

「…………うん」麻矢が返事をした。目は覚めているようだつた。

「今日は事務所に行かなくてもいいのか？」鋼は再び聞いた。

「…………」麻弥は答えなかつた。

「何があつたのか？」

「……事務所、昨日でクビになつたの」

「どうして？」

「……わからない」

「だつて、エンペリアル社から『デビュー』の話が決まりそんなんだろ？』

「もうないの」

「どうして？」

「デビューの話が……なくなつたの、おととい。それで、昨日は事務所からも、辞めてもらひつて。理由はよくわからないの、どつちも」

おとといから、鋼のレコード・ティングが大詰めで、麻矢と顔を合わせる時間がとれなかつたのだ。

「わからないって、お前……」

（オレがエンペリアルとケンカして辞めたことと、何か関係があるうな原因なのか？）

鋼は、それを妹に訊こうとして、すぐ呑み込んだ。

「エンペリアルには、まだ話せるオレの知り合いもいるんだ。ちょっと事情を聞いてくる」その代わりにそう言った。

「やめて！ もういいの！」妹は布団を荒てて剥ぐと、鋼に険しい顔を見せた。

「だつて、お兄ちゃんは今日だつてバンドの用事があるんでしょ？」
「そつちは大丈夫だ。レコード・ティングは終わつてゐるから、今日急に休んでもそれほど迷惑はかかるはずだ」

そういうと、鋼は手に持つていたジャケットに袖を通して、部屋を出て行つた。

「だから、もういいんだつて……！」

麻矢には、それを追いかけて静止する氣力はなかつた。

と向かい合っていた。

「本当に10分しか時間が取れないからな、手短に頼む」

エンペリアル社の制作本部一課の課長、堀上が言った。彼は、元々新人だったマスター・フェイスの担当であり、特に鋼とは友人としても親しい仲だったが、最近、現在の役職に若くして出世したのだった。

「突然ですまない」鋼が、気心知れていた友人に、深々と頭を下げた。

「麻矢が、突然理由もわからずデビューの予定を取り消されて、所属事務所もクビになつたんだ。何かそのことで知つているか？」

「ああ、妹さんね」堀上が何かを思い出すように、わざとらしく上を向いた。「オレの担当じゃないんだけど、何か問題はあつたようだな」

「思い当たることはないか？」

「どうだろうねー」

「オレがエンペリアルと揉めて辞めたことと、何か関係があるのか？」

「んーどうだろうねー、うちみたいな会社の場合は、ないとは言いかれないだろうね、正直。お前を売り出すのにかなりのお金をかけた側からしたら、心情的にも決してスッキリしないだろうからな」「でも、オレと麻矢は、音楽のことでは関係ないだろう！」

「いやいや、オレが決めたことじゃないから、言われても困るつで。それに、彼女自身にも、いろいろ原因はあつたんだと思うよ。だってうちとのレコード契約だけじゃなくて、事務所の方もクビになつたわけだろう?」

「・・・・・」

「そう言えば、ちょっとしたウワサも聞いてたけどな・・・・・」

「何だ?」

「何だっけ、名前忘れたけど、あそこ芸能事務所の所属の娘達の何人かが、最近仕事に身が入つてないって、あちこちで話を聞いて何人かが、最近仕事に身が入つてないって、あちこちで話を聞いて

たし。確か麻矢ちゃんが所属してたところだったと思つよ」

「デビュー前の新人が、そんなにあちこちでウワサになるのか？」

「身が入つてないって、ボイスレッスンのことか？」

「何言つてんだよ、接待に決まつてんだろ」堀上の顔が一瞬にやけた。

鋼は固まつたまま、何も言えなかつた。

「みんなやつてて、お前の妹だけやつてないなんてあり得ないんだからさ」

鋼は目の前の元親友を殴り倒したかったが、彼だけが悪いわけではないといふこともわかつていて。そのデリカシーのなさに対しては許し難いものがあつたが、それだけでは、この公衆の面前で拳を振り上げる理由としては不十分だつた。

鋼はこみ上げる怒りを必死に抑えていた。

「じゃあ、オレそろそろ時間だから」堀上が席を立ち上がつた。

「・・・心情的に」鋼が言つた。「心情的にスッキリしてないのは、オレも同じだよ。オレは、お前が思つている以上に、エンペリアルのことを知つてゐる

「おいおい、まったくお前らしくないな。あの時の、いつもクールなお前はどこへ行つた。本当にバカなことは考へない方がいいぞ。妹さんを大事にな」

そういうと、堀上は携帯をいじりながら足早に去つていつた。

「お前こそ、だいぶ変わつたな」

鋼の最後の声は、堀上には届かなかつた。

「はい、トライドロックマガジン編集部です」

「多川と申しますが、編集部の岸さんをお願いします」

「はい、わたくしですが・・・あれ、マスター・フュイズの多川君

？」

「あ・・・はい、元、ですけどね」

「久しぶりだねー！ 今どうしてるの？ 音楽は続けてるんでしょ？」 彼はフロッグスの存在すら知らないようだつた。トライドロッタマガジンが対象にしているアーティストの知名度を考えれば、知らなくて当然だつた。

「はい、今は別のバンドを始めています。でも、今日お電話したのはそのことじやなくて」

「何、どうしたの？」

「そちらの会社で、政治や芸能の裏情報を取り上げる有料サイトがありますよね」

「ああ、あるよ、スコープでしょ？」

「そちらに提供したい情報があるんです。話を通してもうえないのでですか？」

「えーっ、そんな話かい？ 何だか意外だな。多川君つて言つたら、熱心にベースを弾き続ける姿しか思い浮かばないから、芸能情報とか気にしてるなんてびっくりだよ」

岸は、マスター・フェイスのインタビュー記事を手がけていて、メンバー全員のことによく知つていた。

「で、どんな情報なの？」

「ここでは言いくらいことです」 鋼は声を落とした。

「ほー、そんなにヤバい話なの？ それより、そんな話して大丈夫なの？」

「覚悟はします」

「僕も紹介する立場から責任もあるんで、どんな内容か教えてよ」

鋼はちょっと間をおいてから、一気に話し始めた。

「はつきり言いますけど、エンペリアル社の音楽に含まれている洗脳情報のことです。

音楽自体の内容とは無関係に、音の中に、耳に聞こえないけど、人の精神をコントロールする情報が入っているって話です。

自社の音楽に、強制的に好意を持つ暗示をかけられるだけでなく、食品のタイアップ曲には食欲を増進させる効果があるとか、い

ろこくな目的で使われ始めています。

エンペリアルは去年から始めていますが、ウルティマ社もそれをイエロー・アウルのシングル曲で試験的に使い始めて、予想以上の効果を上げているって聞いてます。

後々、その効果を政治利用する予定も……」

熱くなつて、ややしゃべり過ぎたことを後悔した鋼は、岸から反応がないのに気づいた。

「もしもし？」

「……ああ、聞いている。多川君、その話、どこから聞いたの？ そんな話はネットと隅々まで見ても、ガセでも載つてないようないbronデモ情報だよ。根拠はあるの？ 証拠になる写真とか

「……特にありません。ただ、僕がいたときのマスターフェイスの曲では、すでに使われています。マスタリングの段階で混入されるんですが、僕はそこに立ち会っていますから」

鋼は、マスターフェイスの楽曲の売り上げを少しでもあげるために、その場に流されてしまっていた当時の自分を恥じていた。

「スコープは業界でも信憑性が高いっていうのが売りだから、話だけっていうのは難しいと思うんだよね……ここから出た情報は、影響がすごく大きいし」

「……だからお願ひしてるんです。しかも知っていることはまだありますから」

「第一、そんなことをリーグするつて、多川君らしくないよね、どうしたの？」

それを言われるのは一度目だった。

「……いや……すいません」鋼は訳もなく謝った。

「まあ、スコープの人には相談しておく。あまり期待しないで待つて。もし行けそうだったら、また詳しく話を聞くから」

「はい、よろしくお願ひします」鋼は電話ながら、頭を下げた。

「今日も鋼クン、来ないね」

「ミキシング」一日の朝、依緒は首をひねりながら言った。

「オレのところにも、連絡はこなかつたな」怜も不安な顔をした。

「こっちから、いくらかけてもつながらないし」

「鋼にもミックスした曲のサウンドを聴いてもらわないと。自宅に

できあがった音のデータは送っているんだけどね」

とその時、依緒の携帯が着信した。アイオンレコードの秋佳から

だつた。

「そっちに鋼クンは来ているか?」秋佳が尋ねた。

「いえ、昨日から来てないんですよ」

「今、妹さんから電話があつてな。昨日の夜から家に帰つてないそ

うだ」

「えっ!」

「妹さんは、鋼クンがレコーディング中なのは知っていたから、スタジオで寝泊まりしたのかと思ったらしいが、心配になつてかけてきたようだ」

「どうしたの?」怜は、通話したままこわばつた表情の依緒を見つめた。

依緒の携帯に、鋼の遺体が発見されたと警察から連絡が入つたのは、その直後だった。

湾岸沿いの倉庫わきで、倒れていたという。死因は不明だったが、薬物の過剰摂取ということらしかつた。

依緒、怜と莊太は、その場所へ駆けつけた。

ショックのあまり、怜の記憶には、その後しばらくの出来事が明確には残されていなかつた。その日のうちに実を受け入れられず、錯乱しそうになるのを必死で耐える以外になかったことは憶えていた。

莊太はすぐに、狂ったように号泣した。一年前に両親を亡くしたばかりで、そのときのトラウマもいつぽんに襲ってきたようだった。
「きっと僕に、死神か何かいるから・・・」莊太は泣き疲れた頃につぶやいた。根拠のない妄想に取りつかれているようだった。
「いや、それはない。莊太はまったく悪くない」怜は、莊太の肩にしばらく手を乗せていた。

絵美もその横で、泣きじやくり、目を腫らして言った。

「鋼クンは、クスリなんてやってないはずだよ、全然そんな感じじやなかつた・・・タバコも吸わないし、ストリートライブの後、みんなで飲みに行つたときも、お酒の飲み方がわかつてゐる人だつた。それなのに・・・何かおかしいよ・・・」

依緒は無表情だつた。警察からの事情聴取に自ら進んで、冷静に受け答えした。しかし、顔は人形か何かのようにならぬがなかつた。

鋼の妹の麻矢は、安定剤を飲んで熟睡していることだつた。眠るまでは、尋常ではない取り乱し方だつたようだつた。

スタジオではいつさいの作業が中止となり、怜はその日、夜遅くに自宅アパートに一人で帰つた。
(もうバンド活動どころじゃない)

部屋に着くなり、怜は床に倒れ込み、そのまま朝方まであれこれと思いを巡らし、明るくなる頃に眠つた。

音楽の価値が、一気に最低にまでおとしめられる一日だつた。

鋼の死は、薬物の過剰摂取によるものと断定され、殺人の疑いはない、ということになった。

家宅捜索が行われ、妹の麻矢の部屋までもが入念に調べられたが、薬物はどこからも発見されなかつた。

人気バンド・マスター・フェイスの元ベーシストの死亡事件は、マスコミでも大きく報道されることになった。

マスター・フェイスは、鋼への美しい追悼文を発表、ついで彼をテーマにした美しいバラード「ステイールハーツ」を緊急リリースした。

バラードは異例の大ヒットを記録、マスター・フェイスはそれを機に、日本を代表するバンドのひとつとしての地位を確立しつつあつた。

フロッグスの奇跡的なレコードティングの音源は、外注のエンジニアやジャケット・デザイナーの尽力でアルバムとして完成し、秋佳と依緒によつてリリースのための手続きが進められた。

ライブハウスからの締め出しと同様に、アルバムの流通についても原因不明の障害があつたが、ネット配信、公式サイトでの受注販売、一部の小売店舗からの販売には、なんとかこぎ着けることができた。

だが、鋼の死とそれによるメンバーの精神的ダメージによつて、あらゆるプロモーション活動の機会は断たれた。定期的なミーティングすらなくなり、フロッグスは空中分解寸前だつた。

しかし、鋼にとっての遺作となつたこのアルバムは、皮肉にも、彼の謎の死という話題性によつて、高い注目を浴びることになつて

いつた。

鋼の死から三ヶ月後。各々が少しづつ、悲痛を心中に受け入れ始めてきた頃。

依緒は、久しぶりに触れるグランドピアノで、リストの『愛の夢』を弾いていた。

あまりに久々なので、運指が粗く、ミストーンを所々出した。

「お茶入れてきたから」

絵美がトレイを持って部屋に入ってきた。

ここには絵美の自宅、2LDKの防音の高級マンションだった。

「はい、いただきます」

依緒はあわてて演奏を止めて、絵美に向き直った。

「あれ、途中でやめないで弾いてよ、って私が声かけちゃったからだよね」

「じゃなくて、絵美ちゃんの前でこんな下手なピアノ、恥ずかしいよ」

それでも、目の前にあれば弾かずにはいられないほど、依緒はピアノを愛していた。

「これはすごくいいピアノだね」依緒は鍵盤のフタを降ろした。
「だってキノウチのピアノだもんねー」絵美は冗談ぽく言った。
二人は笑った。

「どうしても、続けるのは無理?」

もう、依緒の顔は真剣な表情に変わっていた。

「うん、ごめんね」絵美はこくりとうなづいた。

「あるアーティストのバックバンドの仕事が入ってきたの。レコードイングとライブツアーとね。引き受けると、たぶん向こう一年は

スケジュールが埋まっちゃうかもしれない」

「そう」依緒は、がつかりした顔をみせて絵美を困らせたくはなかつたが、難しかつた。

「そのアーティストは以前からずっと尊敬し合ってきた仲だから、今回も断わりたくないの、どうしても」絵美が言つた。

「わかった・・・・・それならしかたないよね」依緒は強くうなづいた。「怜クンたちや、秋佳さんには先に『まくへおめでた』

「ごめんね」絵美はもう一度謝つた。

「いいの。うちは至らないところも多いし、決して条件のいいお仕事をじやなかつたと思うけど、本当に今までよくしてくれたと思うもん。ありがとうね」

絵美は、現状の実力と人脈で充分に、音楽業界のトップでやっていくことができたのだ。

「少ない人数の社員だけで、レコードティングに関わってマネージメントもやって、すごくよくやつてるつて思うよ、アイオンつて。依緒ちゃんがそれだけ優秀なんだよ」

「やだー誓めても何も出ないけどね・・・・そりだ、絵美ちゃん、今日は珍しく時間あるんでしょ?」

「うん」

「じゃあ、これから買い物とか行かない?」

「楽しかったねー結局、誘われた私の方が、いろいろつき合わせちゃつたよねー」絵美は、依緒の車の助手席でショップの大きな袋を抱えていた。

「ううん、私もたくさん買ったもん」依緒は、左ハンドルを握り、前を向いたまま答えた。

ラジオから、マスター・フェイスのバラード「スティールハーツ」が流れ始めた。

「これ、きれいな曲だね・・・・演奏はともかく、楽曲に珍しいイ

ディアーナを感じる」依緒が言つた。

「イディアーナ？」 絵美が眉にしわを寄せた。

「あ、いや、何でもないの」

「こんな売名ソング、誉めるのがおかしいよ」 絵美がラジオを別の局に変えた。

「あ、まさか、さつきのが？」 依緒はマスター・フェイスを聴いたことすらなかつたのだ。

「でもあの曲、鋼クンがフロッグスに書いてくれた曲と、コード進行がよく似てるんだよね。もしかしたら、鋼クンが書いたお蔵入りの曲を、どこから掘り出してきて使つてるのかも」

依緒は、しばらくできた沈黙を埋めるために、話題を選び出した。

「絵美ちゃんつてさ、ずっとつき合つてる彼氏がいるんだよね？」

「うん、お互忙しいから、最近なかなか会うヒマないけどねー」「絵美はにやけた。「依緒ちゃんはいるの？ あんまりそういう話してなかつたよね、依緒ちゃんは。口を開けばみんなの心配ばっかりで、自分の話をしないから、謎だらけだよ、未だに」

「そうかなー、私はいないよ、彼氏」

「仕事が恋人とか言わないでね」

「音楽が恋人、かな」

「あれ、怜クンの音楽が、じゃなくて？」

依緒は黙り込んだ。

「好きな人はいないの？」

「ん、えつ、ええつ？」 依緒は動搖を隠せなかつた。

「底抜けにピュアだなー 依緒ちゃんは。ほら、ちゃんと落ち着いて運転してね」

絵美は、ちゅうど右折する依緒をハラハラしながら見ていた。

「うん、まあ、いるには、いるけどね・・・」

「まさか、秋佳さん？」 絵美の目が皿のようになつた。

「イイイツー！」 依緒は意味不明なうなり声を上げた。

「秋佳さん、うちのパパと同じくらいの歳だと思つたけど、カッコいいよね～若々しいし」

「確かに・・・・尊敬・・・・しますよ」依緒は低い声で言った。

「秋佳さん・・・・ステキな・・・・人だと思います」

「ふうん、やつぱり、やつだつたのか・・・」

「・・・・つて、そんな言葉に」まかされるかあ～！」

絵美は、依緒が運転中でなければ、身体ごと飛びかかりそうな勢いだった。

「ギター弾いてる時の怜クンを見つめる依緒ちゃんのうつとりした眼、眼、眼！ キラツキラしたピンクのお花畠にでもいるのかつてくらい、いつもすごかつたよお～。最初見つけた時は、いっしょに弾いてるこっちの演奏がメチャクチャになりそうほど、吹いてしまいましたっ！ 今だから言えるけどね！」絵美はフォルテのスタッカートで畳み掛けた。

依緒はしばらく何とも言えない表情で言葉を選んでいたが、やがて真剣な顔で言った。

「・・・・音楽を好きになるのと、それを生み出す人を好きになるのは、別でしょう？ でもね、もつ私にも・・・・よくわからんないの。どう思つ？」

「ふうん・・・・」絵美も急激に静かになつた。「そうだねえ～いつそのこと、その質問をじ当人に投げかけてみちやつたら？」

「ええっ、それは困らせちゃうよ・・・・」依緒の顔が一瞬にやけたように見えた。

「もういいじゃない、いぐりでも困らせちゃえば、言わないまま終わるよりはいいよ」

絵美は穏やかな顔になつていた。

「だって、人間なんて、いつ死んじゃつか、わからないんだもん・・・

・

その翌日。

「怜くん、今大丈夫？ 何してる？」

依緒が怜に電話するのは一週間ぶりだった。

「バイトが終わって、ギター練習してるよ」怜は相変わらずの返事をした。

「大事なことがあって、話したいの」

「うん、何？」

「これから会いに行つてもいい？」

「うん、前に三野さんといった団地の中の小さい公園にいる。今はひとりだけね」

怜は、他に誰もいない夕方の児童遊園で、依緒から、絵美の脱退を報告した。

それを聞く彼は努めて冷静だったが、やがてひとりになつて考えた時に、深い悲しみがわき上がりてくることは覚悟していた。

これで、現状フロッグスのメンバーは、怜と荘太のふたりになつたわけだ。

「最近はよくここで弾いてるの？」

「うん、アパートの新しい隣の入居者がね、生ギターの音量でも漏れてくるのをすごく嫌がって、時々苦情を言つてたのがよくなつたから。練習する時はほとんど外だね」

「なんだ」

「荘太も連れてきて、いつしょにやることもある。ここでも近所迷惑にならない程度にね」

依緒は、ブランコへ歩いていった。

「そう言えば、だいぶ前のことだけど・・・家賃滞納の件で大家が

来て、オレのギターに触れた時、依緒はびくして、あんなに怒り出したんだ?」怜が質問した。

「当たり前だよ」依緒は、ブランコに漕がずに座っていた。「例えば、バツハの人生のどこからでも、一週間くらい楽器と楽譜を取り上げたら、どうなる?」

「作曲ができない? 彼に音感があるなら、作業がやりこべくなるくらいかな?」

「だとしても、それだけで音楽の歴史に大きな損失が残るでしょう? 学ぶべきことを学び遅れるかもしれないし、生まれるべきだった曲が生まれてこないかもしない」

「…………うん」

「私たちの協会は怜クンを、そういう者として扱っているの」

「…………なんだかな、なかなか荷が重いな」

ブランコから飛び降りた依緒は、ベンチに座る怜に歩み寄った。

「今度は、私から質問するね……」依緒が言った。

「何?」

「どう訊いていいのか、わからないんだけど」依緒の表情が陰つた。

「何を?」

「…………私が、音楽を続けさせたせいで、怜クンは、苦しいでない?」

「まさか! どういう意味だよ? 依緒には助けられてばかりなの

に」

「イディアーリー保護協会の話は、秋佳さんから聞いたでしょう?」

私たちが過去に助けてきたたくさんのお医者たちは、みんな素晴らしい才能を持っていたって。

でもね、その中の多くの人は、あんまり幸福な一生を送ってないんだよ。若くして亡くなってしまう人もたくさんいるんだよ。どうしてそうなってしまうのか、って秋佳さんに訊いたこともあ

る。

そうしたら……

皆一人一人が、自分自身の心で、魂で、ありのままの美を感じ取れるようになること。

それは素晴らしいことだけど、人の心を支配するために生きている人たちにとっては不都合なことなんだ、って。

この世界には、いつの時代にも、新しい美の価値観が勝手に生まれてくることを、好まない人たちがいる。そういう人々は、様々なたちで芸術家を攻撃したり、仲間外れにしたりする、って。だから、イディアー保護協会は、時代を変革するアーティストたちを、抑圧から守らなければいけない。

それができなかつたのは、協会の力不足だつたんだ、って。

でも私たちがもつと努力すれば、改善できることだつて。

これからは、素晴らしい芸術を生み出すこと、幸福な人生を送ることは、両立できる、それは難しいことじやないつて、言つてくれた。

私も、それを信じてやつてきた。それを信じられたから、やつてこられた。

なのに、それなのにね……

依緒は泣き声を上げた。

「鋼クンが、死んじやつたんだよ！」

「それは依緒が悪い訳じやないだろ？」「怜が耐えかねて、ベンチから立ち上がりながら叫んだ。

至近距離で向かい合つた依緒の言葉は止まらなかつた。

「普遍的な美があるのはわかるよ。何十年、何百年経つてもずっと愛され続ける音楽。それには確かに、普通のものとはまるで違う、ものすごいエネルギーがあるって。

でも、それを維持するために、アーティストがずっと苦しみ続け

なきやいけないんだつたら、意味ないじやない！　イディアーは人の幸せのためにあるんだよ！」

「依緒・・・・もういいんだ」怜はそれ以上何と言つていいかわからなかつた。

「絵美ちゃんが、怜クンに訊いてみろつて言つたけど」依緒は怜に駆け寄つた。「もう、わかつたよ、私は・・・・・・」

「今の私には、怜クンが一番大事なんだ・・・・」

依緒を抱きとめた怜は、そこで自分の中の依緒への想いを確信せざるを得なかつた。

しかし同時に、他の誰かがやるべきことを、自分が説明なく引き受けさせられているかような違和感もあつた。

怜は、その解せない感覚の原因を探ろうとした。

肌の白さから雪を連想させるような彼女の体温は意外なほど熱く、怜の背中まで回つた細長い腕は意外なほど力強かつた。

「依緒・・・・君は、このオレじゃなくて、オレの音楽の方を・・・・」

「違つ・・・・もう、その話はとつぶに解決してるので・・・・」

「怜クンを、危険な田に遭わせるくらいなら・・・・もう・・・・」

（これで、オレの音楽は終わつたのかもしれない、それでいいのかもしれない）

怜はその時、依緒の存在以外は、何も感じなくなつた。

あれ以降、依緒からの想いを、怜はどう受け止めてよいかわからなかった。

彼女へ何らかの意志を示さなければいけないことはわかつていてが、何もできずにいた。

下層階級としての劣等感もあったかもしないが、依緒を今までずっと、どこか遠い存在に感じていたことに気づいた。

依緒からの連絡は、徐々に少なくなり、内容も事務的になつていった。

依緒は、怜が未だ音楽に対する興味と向上心を失っていない、ということを確認すると、安心した様子を見せた。

まるで、「ちゃんと食事をしている」とだけ言えば安心する、母親からの「安否確認」に似ている、と怜は思った。

アーティストとマネージャーの恋愛は通常、会社から禁止されている例が多いのを、怜は知っていた。アイオンレコードもその例外ではなく、依緒は頭を冷やしているのかもしれない、彼はそうも考えた。

怜は、もつと大きな心の問題を抱えていた。

自分にとつて鋼の死が何を意味するのか、という答えのない問い合わせ、抜け出さねばならなかつた。

始めはしばらくの間、イエロー・アウルからの仕打ちと同様に、鋼からも裏切られたような気持ちになり、自暴自棄になつてみたこともあつた。

逆に、自分よりも才能がある鋼をリーダーにしておけばよかった、

とこう後悔の念で自分を責めてみたりと、怜の思考は混乱が続いた。

フロッギーズのアルバムの売り上げは、2000枚以上に達した。これは、ライブ活動を一切行っておらず、プロモーションもできていない新人バンドのセールスとしては、異例のことだった。しかし、怜はこれをすべて、元マスター・フェイスとしての鋼のおかげだと解釈した。

今はイエロー・アウルも、とても有名なバンドになつた。しかし、怜がイエロー・アウルの元メンバーであることは、彼らの新しいファンのほとんどには知られていないことだつた。怜はデビュー前に脱退したのであり、そこは鋼と事情が違つたのだ。

依緒から、印税の振込について連絡があつた時も、決して怜は喜ぶことができなかつた。家賃を立て替えてくれたアイオンレコードに借りを返せる、という安堵感以上には何も感じなかつたのだ。（これは、本当にオレが受け取つていいものだろうか？）

それを口に出せば、依緒を無意味に苦しめてしまつ」とはわかつていた。

時間が経つにつれ、怜は、音楽をやり続けなければいけない、といふことに気づき始めた。

まず、演奏に心を集中させている間だけ、気持ちが楽になる、ということを知つていた。そして、死んだ鋼の分までも音楽を続けるければならない、とも感じた。

しかしそれは、実存的な意味での使命感だつた。もうすでに、音楽業界で成功したい、という願望は、少しづつ消えつつあつた。ライブに出演させてもらえる場所が見つからないのは相変わらずだつた。上昇志向を失つた怜は、そのことを悔しく思う気持ちすら失せ始めていた。

（成功しなかつたバンドマンはだいたいみんなこんな気持ちで、音

樂をあきらめていくんだろう。オレだけが特別じゃないんだ（）

依緒から疎遠になつた怜の救いは、莊太の存在だつた。

彼とは、唯一残つたメンバーとしての絆もあつた。が、それ以上に、莊太とふたりで演奏することで、彼から学ぶべきことがとても多いことに、今さらながら気づいたのだつた。

莊太は、並外れたリズム感、テンポ感があるだけでなく、リズムについて独自の算術的アイディアを持っていた。彼は、長期に渡る不登校児で、数学の知識など皆無であるにも関わらず、因数分解と順列組み合わせの演算能力に優れ、それらをドラムの演奏に応用していたのだった。そのためか、彼は誰にもマネできないよつな複雑なポリリズムを叩くことができた。

莊太の自宅や、児童遊園などで、膨大な時間のジャムセッションの中で、二人は互いのアイディアを発展させ、息の合つた演奏に極限まで磨きをかけていった。

しかし、それはまったく無目的なエネルギーだつた。誰に聽かせるためでもない、自分たち自身の楽しみのための。
そんな状態が、約一年ほど続いた。

その日も、ふたりは莊太の家で、小音量で練習をしていた。怜のアパートよりは、いくぶん壁が厚いようだつたからだ。部屋は散らかつてはいたが、以前ほどのゴミの山はなくなつていた。怜も来ることに、掃除を手伝つていたのだ。

初めの頃は、天氣の話題にすら返答に困るほど会話が苦手だつた莊太も、最近は怜とよく話をするようになつていた。

「莊太」

「ん？」

「今さらだけどさ、最初に依緒と会ったきっかけって、何だったの？」

？

「いや…………いきなりうちに来て…………」

「それで？」

「『何か楽器、やつてますか』、って。それで『はい、ドラムを』つて言つたら、『聴かせて下さい』って上がり込んできて

「それが初対面？」

「うん、ちょっと依緒が言つてたのは…………何か感じじるらしいよ。あの『』は特別、よくわかるらしい、遠くからでも…………それ、なんて言つてたっけ」

「イディアーカ？」怜は、だいぶ前に秋佳から聞いた言葉を思い出した。

「そうだ」

「莊太は、それを信じるのか？」

「うん、だって…………へタクソな演奏でも、なんか伝わってきて、すぐ心を打たれる時つてないか？ 逆にうまい演奏でも、何も面白くないものもあるだろう？」ただ器用なだけで

「…………確かに、そうだな」怜には、それが思い当たることは度々経験していた。

「音楽つて、何かがあるんだと思つよ。僕らには、よくわからない何か…………」

「イディアーについて、もっと知りたいな」

怜は、依緒と次に話す時には、聞き出したいと考えていた。

「依緒は言つてたよ、怜のイディアーハ特別だ、って、あんなのは見たことない、って」

「そんなこと言つてたのか？」怜は驚いた。

「莊太はうなづいて、言つた。

「一番まずいのは、世間の人たちが、それにまつたく気づかなくなつてることだ、って」

その時、怜の携帯が着信した。

「依緒だ・・・もしもし」

「一週間ぶりになっちゃったね、今大丈夫?」

「うん、今、莊太の家にいる」

「莊太クンもいるんだね! ちょうどいい、実は、久しぶりにライブができるなんだけど、オファーを受けるかどうか、二人で決めてほしいの」

「えつ!」

「ものすじく急なんだけど、5日後、東京郊外にある中央公園の野外ステージで、恒例で6年目のコンサートをやるの。キャバは2000人以上だから、今まで一番の大舞台だと思つ。」

同じ日には、他にもメジャーアーティストがたくさん出る大規模な野外フェスティバルがあつて、交渉していた出演者がかなり引き抜かれちゃつたみたい」

「それで、オレたちに白羽の矢が立つたのか」

「しかもね、ヘッドライナーは、あのパット・ディヴィスだよ、10年ぶりの来日だつて」

「えつ!」怜もその名前は知つていた。怜は昔から、有料の音楽を自由に聴ける経済状況にはなかつたため、彼のアルバムは持つていなかつたが、ジャズを習い始めた当時に、三野の家でよく聴かされていた作曲家、サックス・プレイヤーだ。

「ただしね、これはNPO主催で、ノーギヤラなの。後進国に教育支援するチャリティーで、アイオンレコードは協賛金を支払つつもりだから」

「それなら、なおさらやりたいね。莊太とも相談しなきゃいけないけど」怜は即答した。

「だつてオレたち、公園でのライブなら百戦錬磨だし、一度、自暴自棄を通り抜けると、こいつら種類の冗談が言えるようになるんだな、と、怜はその時思った。

「でも、ベースもキーボードも不在でどうするんだ?」

「後任のメンバーは、一年間私もずっと探していたんだけど、こちらの条件すべてに当てはまる人が見つからなかつたの……でもね」

「実は、キーボードだけは、候補が一人いたの、私のものすごく近いところに。本当は頼りたくなかった人なんだけどね……もし、そのライブをやるなら、これから交渉に行つてくるから」

「なら、オレたちもいっしょにお願いに行くよ！ 荘太、出かけるよ、説明は移動しながらする！」

怜はいつの間に、莊太の了承はすでに得られているつもりでいた。

「5日後？」

依緒が深々と頭を下げてゐるその相手、依緒の実の弟、木乃内勇が叫んだ。

「いや、待つてよ、その日の前日までは、毎日仕事が入つてるよ、だからリハーサルに参加できないって」

木乃内楽器本社の応接室に、腕組みした勇の甲高い声が響いた。彼のスケジュールには、確認するまでもなく、木乃内楽器の製品をデモ演奏するコンサート、セミナーや取材の予定がびつしり書き込まれてゐるはずだつた。

彼は国内最大手の楽器メーカーの、鍵盤楽器全般を奏するデモンスト레이ターなのだ。

依緒、怜、莊太の三人は、勇と向かい合うかたちで、ソファーに座つていた。

「じゃあ、当日ぶつつけでやつてよ。あんたらできるでしょう？」
依緒が強引に押した。

「あのね、その日は、トラッジロック・マガジン・フェスティバルを、彼女と観に行く予定なの！ このところ予定が合わなくて、何週間ぶりのデートだと思ってるんだよ！」

「それなら、彼女もこっちに連れてくればいいでしよう！」 チヤリ

ティーライブの昼の部にたつた30分出演したら、後は好きだけデートしなさいよ！」

「あー、あのさ、もし親父にバレたらなんて言つんだよ。最大手のレコード会社から疎ましがられてるチャリティーライブに、木乃内楽器の顔であるオレが肩を持つてことが、各方面にどんな影響があるか、考てるのか？ 親父の顔に泥を塗りかねないんだぜ」「伶が間に入つた。

「やつぱり、これはいくらなんでも無理があるよ。勇さん、突然押しかけてすいませんでした・・・」

「私が責任取る！」依緒は叫んだ。

父親のことは言われるのを最初から覚悟して来ていたのか、その声には搖るぎないものがあつた。

「お父さんが怒つたら、私がちゃんと説明して謝るから・・・」依緒は声のトーンを落としていった。「勇はとりあえず、できる限り・・・バレないようにやつてちょうだい」

「もう・・・」勇は一見、鋭くてキツそうな性格のように見えるが、頼まれると断れないところがあるようだつた。「しかたないな・・・彼女にも謝らなきや・・・」

「それで、ついでなんだけど・・・」依緒がまた頭を下げた。
「何、まだ何があるの〜？」勇が逃げ出しそうな体勢になった。
「ベースが弾ける人を紹介してよ、ものすごい一く腕の立つ人。で、できればイディアーガ出まくりな人ね」

「そんな人は見つからないよ！ 知り合いでうまいベーシストはみんな、もうひとつの方に出演するんだから」「じゃあ、どうするのよ〜」

「オレに言われても・・・ならベーシスト無しでもなんとかするよ、オレが」

「ああ・・・そつか、そつね」依緒は、ふと力を抜いた。
「オレ、シンセにもオルガンと同じような足鍵盤つけてるし」

勇は、足鍵盤でランニングベースを奏しながら、左手でコード、

右手でアドリブをプレイするジャズオルガンの名手でもあった。

「勇は、ラヴェルの最初のピアノコンチェルトも弾けるぐらい、左手も上手だからね」

依緒の言つラヴェルのピアノ協奏曲第一番は、左手のみですべてを演奏する超難曲である。さらに、彼の左手は、ロックベースを表現するに充分なグルーヴ感をも持つていた。

つまり木乃内勇は、鍵盤楽器のオールラウンド・プレイヤーということでは、日本の最高峰にあり、そのテクニックは絶美すら凌駕する達人だったのだ。

「しかし、姉ちゃんはいつから、こんなに押しが強くなっただんだか。・・・昔は、置物みたいにおとなしかったのに、人って変わるもんだよなあ」

「勇君、本当に無理言つてすいません、よろしくお願ひします」

「いえいえ、こちらこそ、よろしくね」勇も一礼した。

「もしかして、怜君は、『イディア』の源泉』つてことになつてゐるの?」

「勇、何でそんなこと知つてゐるの?」

「いや、オレは協会員じやないからよくは知らない。ただ、オレも小さい頃、おじいちゃんからイディアの話は聞かされていたから」勇は答えた。

「おじいちゃんは、姉ちゃんよりも、一応長男であるオレに、協会員として跡継ぎしてもらつたかったみたいだつた。でも、生意気なガキだつた当時のオレは、胡散臭いつて思つて嫌がつたから、無理強いはされなかつたよ」

「勇は、イディアを信じてないの?」依緒が、今まで弟には避けてきていたその質問を、あえて訊いた。

「よくわからない。でも、オレだつて演奏活動をやつていて、不思議な体験をすることは時々ある。音楽は、ただの音の集まりじやないつて、理屈抜きで感じるんだ。何か人智を超えた、想像もつかない

い力がある、っていうのか・・・」

「イディアーツていうのは、結局何なんですか？」

怜はどうしてもそれを知りたかった。

勇は言った。

「うちのおじいちゃんの話では、この地球の魂、だと言つてた。地球自体の美的感覚、みたいなもので、本来は、根っこでつながっている人類全体の精神の一部だとも」

「地球の魂？」怜は眉にしわを寄せた。

そこで依緒が説明を受け继いだ。

「例えば、美しい花の造形とか、クジャクの羽とか、自然の絶景・・・。あいうものがまったくの混沌と偶然の中から生まれてきたものだつて、本気で断言できる？ あれは宇宙の法則に基づいてイディアーツがデザインしたものだつて言われてる。

そして、イディアーツが人間の心と身体を通して表出するもの、それが芸術なの。

私たちの協会は、中でも音楽を最重要視しているの。もつとも抽象的で物質世界から遠い表現である音楽からは、イディアーツが本来のエネルギーを保つたまま表出される、信じているから

突然の地球規模の話に圧倒された怜だつたが、ここですべての疑惑をはつきりさせるため、怯まずに尋ねた。

「それで結局、そのイディアーツが、どうしてそんなに大事なの？」

「イディアーツは、人類にとって重要なエネルギーだから。人間が高度な精神を持つ動物に進化したこと、そのものに関わっているの。これからも人類の精神が進化し続けるために、どうしても欠かせないものなんだつて。

人間は大昔には、音楽から簡単にイディアーツを発生させることができた。でも今はエゴによる商業主義が音楽を支配していて、それを聞き分ける感性が、人類から急速に失われつつある。

今の音楽シーンに懐古趣味が続いているのは、過去の優れた音楽

には、確かにイディアーガ溢れていたから。人は自然にそれを求めて、後世に伝えていくの。

でもね、本当はイディアーハ、斬新なもの、進化したもの得好むの。昔つくられたものからは、少しづつイディアーハ枯れしていくしかないの……」

「それで、新しい時代のアーティストが、新しいイディアーハ源泉となるべきなのか……」勇は珍しく姉の話に聞き入っていた。
「怜クン、この話を信じるか、信じないかは、実はそんなに重要じゃないの。

ひとつ知つておいてほしいのは、イディアーハ無邪氣さを持つている人、何かに夢中になつてゐる人が大好きなの。子どもみたいにな。そして、見え透いた作為や、打算が大嫌いなの。

だから、イディアーハ意図的に呼び出したり、つくり出したりしようとした、協会の過去のあらゆる試みは、すべて完全に失敗に終わっているの。

でもフロッギスのみんなには、イディアーハ呼び出す特別な才能がある。

今まで怜クンにイディアーハ説明しなかつたのは、もつたいぶつていたからじゃない。つかまえようと意識すればするほど、イディアーハ逃げていってしまうのよ。イディアーハ、新しいテストの採点基準のように考えてほしかなかつたの」

「それなら……今まで通り好きなように、音楽をやればいいんだね」莊太が言った。

「その通りだな」怜は、莊太の肩を叩いた。

彼は、イディアーハそのものよりも、依緒を理解できた気になれたことがうれしかった。

フロッグス、約一年半ぶりのライブが近づいていた。

このフェスティバルは、終日行われ、9組のアーティストが30分から1時間ずつ出演する。したがって、リハーサルは前日に行われた。

リハーサルでは、フロッグスは勇抜きの一人だけで演奏せざるを得なかつた。これはイベントのエンジニアやその他のスタッフにとっては大きな負担になる問題で、秋佳と依緒はその調整に追われた。目の前にある、2000もの空席を前にしただけで、怜は足がすぐむ想いだつた。

(これが明日には、人で埋め尽くされるんだ)

その時にどんな精神状態になるのか、怜には想像もつかなかつた。

そして、当日。

彼らの出演順は、昼の部の半ば、13時の予定だつた。

12時を過ぎ、フロッグスの前の出演であるトリオ『ボクシン』の呪術的な演奏が始まつた。彼らは、アイオンレコードの海外契約アーティストだ。

和太鼓と、ガムランの打楽器を組み合わせた独自のパー カッシュヨンキットによる複雑なリズムが、オーストラリア先住民のバイブル状の楽器「デイジユリドゥ」の野太い低音と絡み合い、会場を異世界に変えてしまつた。

莊太は、ボクシンをすっかり気に入つてしまい、自分の出番のことも忘れて舞台袖で聴き入つていた。

しかし、依緒は気が気でない状況だつた。まだ勇が到着していなかつたのだ。

ボクシンのマネージャーと、イベントのスタッフとの通訳をやるを得なかつた依緒は、ボクシンの三人がステージに上がつてからようやく、勇の遅れに気づいた。

「遅くなるとは言つてたけど、まさかこんなに……勇はこうこうことで時間に遅れる子じやないから、油断してた」

依緒は、怜にそう言つとあわてて勇に電話を入れた。

「もしもし、勇、あんたどこにいるの？」

「もう下の道に来たから、あと数分で着くよ」

彼はハンズフリーの携帯で、車の運転席から答えていた。電話から派手なエンジン音が聞こえた。

「まさか、勇、あの平べったいスポーツカーに乗つてるの？ 機材はどうしたの？」

「ここにちはー」

助手席から勇の彼女があいさつした。

「実は、親父に見つかっちゃつてね、来る寸前に」

「えっ？」

「めちやくめちやに怒られたよ、結局オレが一人で」

「それでどうしたの？」依緒は頭が真つ白になりそうだつた。

「事情を説明したら、『どうせ断れない仕事なら、思いつき木乃内楽器の宣伝して来い』って、機材をいろいろ貸してくれたよ。昔の電子オルガンから開発中のシンセまで、かさばるものばかり。積むのに時間がかかり過ぎたよ」

「どうやって運んでるの？」

「大型トラックが後ろからついてきてる。機材を組み上げるのに若い社員をひとりローディ役で連れてきたから、そいつが運転してるよ」

勇のイタリア車とトラックがステージ裏に着いたのは、ボクシンの最後の曲が終わりかけたときだつた。

ローディは、運び出しにイベントスタッフの手も借りながら、トラックの中の主要な機材を、ステージで手早く組み立て始めた。持ってきた全部の機材はステージに上がらなかつたが、勇が今回の演奏で使いたい楽器は全て、セッティングすることができた。

フロッグスの演奏は、5分押しスタートの予定となつた。
ステージに上がる寸前、勇は怜に声をかけた。

「本当は、姉貴からフロッグスのアルバムを聴かされた時、いつか君たちと共演したいと思ってたんだ。こんなに早く実現するなんてね」

「本当に、今日はなんてお礼を言ひたらいいのか」怜は言葉に詰まつた。

「今日のオレは、販売促進用の小さきれいな演奏はしないぜ。アドリブソロで対決するつもりでやろう」

日本最高峰のデモンスト레이ターから挑戦を受けたのだが、怜は時間が迫るステージのことで頭がいっぱいだったからか、謙遜の言葉を考える余裕すらなかつた。

「うん」怜は単純にそう返事すると、勇に手を差し伸べ、握手した。依緒はそれを見て、莊太の手を握り、怜と勇が組んだ手の上に乗せた。

四人が手を重ねた円陣が出来上がつていて。なぜか、日本のアーティストたちがライブ前にやる円陣である。

「そういうえば初ライブの時、依緒は言つた。『いつもやらないなつたね』

「よし、今できる最高の演奏をしよう、行くぞ！」怜が声を上げた。

「おう！」三人が答えた。

フロッグスの、30分のステージが始まった。

前に出演したボクシンは、オーディエンスをかなり盛り上げてい

た。その会場の熱気は、ステージに立つことが久しぶりだった怜には、かえってプレッシャーに感じられてしまった。

演奏は、怜が作曲した「キマイラ」から始まった。莊太のドラムのグルーヴ感に、始めから勇の左手のベースがうまくノットしている。

その上に、ギターのメロディが奏でられるのだが、怜は自分の演奏に何か違和感を感じていた。

緊張のためなのか、手がいつもの自分の手でないかのように、ギクシャクした。もしかしたら、このところの練習過多と、さきほどのウォーミングアップのし過ぎで、腱鞘炎の症状が再び出始めたのかもしれなかつた。

(ああ、何かうまくいってない)

怜は演奏しながら、違和感の原因を考えていた。

演奏の粗雑さから、目立たないながらも所々ミストーンやノイズが出来、怜は苛ついた。

(どうしてもピッキングと運指が雑になってしまつ。

あがつてているのか?

力が入り過ぎなのか?

手の調子が悪いのか?

ミニターバランスがよくないのか?

それとも元々オレの実力はこんなもんだったか?

オレのイデイアは、今どれぐらい出ているんだろう…)

(イデイアを新しいテストの採点基準にしないで…)

怜は、依緒の言葉を思い出した。

(「めん、依緒。君は、いつもオレのためにベストを貢へしてくれ

て・・・顔を合わせる度に、どんどん成長していく、きれいになつて・・・。

なのにオレは、依緒のために何もしてあげられない。自分のことすらできない。肝心な時に、いつもヘマをしてしまうんだ。今日みたいに・・・クソ！

本当は、鋼じやなくて、オレが死んだ方がずっとうまくいったのに・・・・

（言いたいことはそれだけか？ 気が済んだら、君の演奏を始めるんだ！）

怜の脳裏で、鋼の声が響いた気がした。

気持ちがしらけてきたことで怜は、ステージにあがる前にみなぎつていた興奮が止み、冷静になりつつあった。

その頃、曲はテーマが終わり、アドリブパートへ入つていくところだった。

この曲のアドリブは、キーボードから始まる。勇は、ベースを足鍵盤に移し、左手にピッチベンダーを構えながら、右手の華麗な指使いで伸び伸びとしたシンセソロを奏でた。

フレーズの語彙が豊富で、感情表現にあふれた素晴らしいソロ。オープニングは酔いしれ、歓声を上げた。

そして、怜にアドリブの順が回ってきた。

今の気持ちの落ち着きをそのまま表すかのように、たっぷりと間をとったシンプルなフレーズから始めた。それに反応して、莊太と勇も、静かな伴奏でそれを支えた。

やがて、そのモチーフは他のアイディアと混ざりながら複雑化し、音域も高い方へ移り、演奏は活力を増していった。

覚醒時と睡眠との境目を意識することができないようになり、怜は知らず知らずのうちに、演奏へと集中していた。

ステージの袖で、身動きもせず見守っていた依緒が言った。

「来る……」

真夏で汗ばむ依緒の肌に、にわかに鳥肌が立つた。

源泉とつながった怜の精神から、たゆまぬ練習によつて制御されたその指先へと、イディアーレは流れ始めた。

イディアーレはそのまま鉄弦の振動に乗つて、エレキギターのピックアップの磁界へと巻き込まれ、電流の周囲で螺旋を描きながらケーブルを伝つていった。

アンプによつて増幅されたその超自然的なパワーは、ステージ脇の巨大なスピーカーから、この物質世界へ、空氣の振動となつて姿を現した。

地球の魂の奥底から呼び出され、この世に具現化した喜びに狂乱したイディアーレは、その場にいた2000人の観客へ向かつて、容赦なく襲いかかつた。

目には見えないが、その気配は会場にいたほとんどすべての者に感じ取れた。イディアーレは咆哮し、乱舞し、観客ひとりひとりの耳へと侵入し、同時に会場全体を飲み込んでいった。

莊太は、怜の強烈なエネルギーに煽られ、手数の多いパワフルなドラミングへと移行していった。

怜のプレイが、瞬間の気合いを込めた水墨画なら、莊太は、緻密な点描画だった。そして、そのふたつの絵が重なり合つことで、さらに深いヴィジョンが映し出されるようだつた。

「これがイディアーレの源泉かよ?」勇は今まで感じたことのない異

変に一瞬動搖した様子を見せながらも、怯まずに演奏を続けた。この凶暴な怪物を、音楽という檻の中などじめておくには、自分の堅実なプレイの支えが必要だ、と直感しているようだった。

伶の内側から溢れ出るイーディアは、掘り続けるのは枯渇する、石油や石炭のようなものではない。使えば使つほどに起き上がりてくれる、無限のエネルギーだった。

（わかつてきた、依緒が言つていた意味が。

依緒は、イーディアをこの世に送り出す、『目的』を持つている。でも、オレは『無目的』でなければいけなかつた。

昔からいつも、オレはみんなに言われてた。

「音楽なんか一生懸命やつて、何の役にたつの？」と。
「売れっ子になつたら、どれぐらい稼げるものなの？」と。

でも、オレには予感があつた。

本当にオレの心を満たしてくれるものつていつのはまつと、一見、世間の役に立ちそうなもいるから生まれてくるんだ（だ）

曲はアドリブパートの後、テーマの繰り返しからコーダへ進み、そして最後に三人の息がぴったりとあつた複雑なフレーズを決めて、演奏が終わつた。

ステージが沈黙したが、オーディエンスの反応はすぐには帰つて来なかつた。

はじめ、観客はそれに違つた様子を見せていた。

呆然としている者もいた。

今何が起きたのか、ひそひそと話しているカップルもいた。

無意味に叫び声を上げる若者達もいた。

イタズラにハメられたかのように、肩を叩き合いながら笑い転げている友達連れもいた。

「Oh, my God . . . Oh, my God . . .」と繰り返しながら、震えている外国人もいた。

そんなまちまちな反応が30秒ほど続いた後、客席の所々からパラパラと拍手が起こった。

拍手は伝染し、歓声を交えながら、会場全体に広がつていった。それが、異常なほどの熱狂に変わるのは、それほど時間はかからなかつた。

怜は「」との外落ち着いて、観客に手を振つて応えると、一曲目の準備を始めたが、興奮したオーディエンスが少し静かになるまで、しばらく待たなければならなかつた。

「やつたな」秋佳が、隣の依緒に言つた。

「やつと・・・」依緒は、一息つくよつとつぶやいた。

「やつと、伝わつた。私が感じたことの、ほんの一部だけど

フロッギングスの残りの3曲の演奏も、観客から並々ならぬ反応を持つて迎え入れられ、彼らはステージを後にした。

依緒は、ステージ袖に戻つてきた汗びっしょりの怜に、飛び込もうとして両手をいっぱいに広げた。

しかし、鉛を背負つたかのように重い怜の足取りを見ると、あきらめたように手を降ろし、三人を控え室へ誘導することに専念した。「よくやつたね、みんな」依緒は声をかけた。

「なんか変なものが出できちゃつたみたいだな」怜が笑つた。「こ

これから、ペース配分も学ばないとね

イベントのスタッフたちは、演奏を終えたフロッグスのメンバー、特に怜を、畏敬の念を持って見つめていた。演奏を始める前と、周囲の視線が全く違つものになってしまったことに、怜はやや戸惑っていた。

「Oh, you're awesome !!」

突然怜の元に、通路の向こうから大柄な黒人が駆け寄ってきた。この後に始まる夜の部のトリで演奏するジャズ／フュージョンの大御所、パット・デイヴィスだった。

次々とまくしたてるように話しかけてくるパットを前に、怜は「サンキュー」以上の言葉が出て来なかつた。依緒が代わりに受け答えするが、会話が弾んだため、依緒には怜にすべての内容を通訳する余裕がなかつた。

パットと別れると、依緒はうれしそうに怜に説明した。

「久しぶりに興奮させられる新人を見た、って言ってたよ。フロッグスがなぜ日本で無名なのか、今どういう活動をしているのか聞かせてほしい、って。後でまた、私が話をしてくるよ」

イベントの昼の部が終了し、インターバルの時間になつた。

控え室にいた怜、依緒、莊太のところへ、勇がいつしょに来た恋人と近づいてきた。もう早々と帰り支度を済ませたようだつた。

「お疲れ様！」勇が怜に声をかけた。「またいつか、いつしょに演奏しよう」

そう言って、ふたりは握手を交わした。

「これからふたりで、トランジ・ロック・フュスの方を観に行くの！ 今から行けば、ヘッドライナーのイエローアウルには間に合つと思つからあ。もう出ようよ！ じゃあね！」勇の彼女が高いハイ

ヒールで踏ん張りながら、勇の腕をドアの方向へ引っ張った。

「は～い、今日はありがとうございました、いらっしゃ～い」依緒はおおげさに手を振つて、カップルを見送つた。

それとほぼ入れ替わりで、控え室に18～9歳の女の口が尋ねてきた。

鋼の妹、麻矢だつた。

「ああ、来てくれたんだね」怜は、開いたドアの向こうにいた麻矢と、ドアを開けた依緒の方へ走つていった。

麻矢と会うのは、鋼が亡くなつてから数日後、以来だつた。

「はい、チケットを送つていただき、ありがとうございました。実家へ戻つてから、あまり表へ出かけなくなつていたんですけど、いい機会になりました」

麻矢は、鋼と似て整つた顔立ちをしていた。あの日から比べてだいぶ痩せてしまつたこともあって、メジャーデビューを控えた歌手としてのオーラは失われてしまつていたが、依然としてとても可愛い女の口だつた。

「今日のフロッグスのライブ、なんて言つていいかわからないんですけど、とにかくすごかったです！」

「ありがとうございます」怜はにっこりしてみせた。

「やっぱり音楽を表現するつて、素晴らしいですよね。私も、歌をやり直したい、つて思ひ始めました」

「ぜひ、そうした方がいいよ」依緒は言つた。

「それから・・・」麻矢はうつむいた。

「私、お兄ちゃんがあんなことする人じやないつて、今も信じてるから、お兄ちゃんが死んだ原因を、知りたいんです。私、どうしてもエンペリアルのことがおかしいつて・・・」

「そうだね」依緒が、言葉に詰まる麻矢に応えた。「私たちアイオンレコードには、それを調べるのに協力してくれる人たちがいて、

もういろいろわかっていることがあるの。今は公表できないけど、麻矢ちゃんと家族の方には話したいと思ってる

「えっ！」 麻矢は顔を上げた。

「でもね」 依緒は続けた。「これは忘れないで。麻矢ちゃんは、自分自身の人生を進んでほしい。悲しみとか、疑いの心だけで自分を燃え尽きさせたらダメだよ。私たちもできるだけ、力になるから」 そして依緒は、号泣する麻矢を抱きしめた。

ヘッドライナーであるバット・ディヴィス・バンドの演奏。怜はそれを、依緒、荘太と共にステージ脇から観ていた。

その演奏は、怜が子どもの頃に三野から聴かされたものとは、まったく別次元の音楽だった。60歳を過ぎてもなお、情熱を忘れず、流行にも媚びずに、進化している彼の姿は、このライブの大トリに相応しい、怜はそう感じていた。

（オレは、彼の歳になるまで、音楽を続けていけるんだろうか？）

怜はそんなことを考えていた。

「今日は、依緒にも会議に参加してもらえてうれしい
イディアーリー保護協会・協会長がディスプレーの向こうから訊いて
きた。

「昨日のライブでかなり疲れたのではないか?」

「いえ、大丈夫です」依緒は恐縮していた。

「彼女はよくやってくれました。東京支部の他のスタッフを、昨日
のライブイベントにあまり回すことができなかつたもので、彼女の
負担が大きかつたのです」秋佳が応えた。

「フロッグスの演奏については、すでにこちらでも確認している。
あんなイディアーリーが噴出したのは、いつたい何十年ぶりになるだろ
うか。これも、君たちの働きのおかげだ」協会長は喜びを隠せなか
つた。

「ありがとうございます」依緒は一礼した。

「会場が日本だつたから、まだオーディエンスの行儀が良くて済ん
だ。もしアメリカだつたら、興奮した観客がステージへ押し寄せて
パニックになつていたとしてもおかしくない。それくらいの衝撃を
世間に『与えられたはずだ』メンフィス支部長も絶賛した。

「場合によつては、一生彼らの下積みを支えていくことも考えなけ
ればならない状況だつたと思うが、君たちの尽力で、彼らが世間で
正當な評価を得るための軌道に乗せることができたんじゃないかな?」
本部長の感想だった。

「いや、それはまだ、どうでしょうか」秋佳が口ごもつた。「マス
マニの反応などもまだ、わかりませんし」

「今回フロッグスに声をかけてきたのは、フォーストレコードという
イギリス資本の企業で、日本でも第4位の大手メジャーです。調査
の結果、現状この会社のアーティストに対する抑圧は、ごく一部の

「彼らが商業ベースに乗りながら、なおかつ自分たちらしい音楽を続けられる状況があれば、それはそれに越したことはないのではないか？」メンフィス支部長が口を挟んだ。

「もつと問題なのは、日本は世界でも有数の『抑圧者』が巣食う場所だ。ただし、フロッグスの音楽は、その日本という土壤で育ってきたもの故に、そこから引き離して安全な外国に移せば良い、といふものでもないがな」本部長は言った。

「もしフロッグスがアイオンレコードの手を離れるとしても、協会からの見守りと精神的サポートは引き続き必要でしょう。

彼らのような無名バンドが、業界大手の一社からあそこまで徹底した活動妨害を受けてきた理由は何でしょうか？ それは、彼ら大企業の人間がイディアーナを感じる能力を持つていることはないにしても、フロッグスがこれから音楽業界に大きな波紋を投げかける存在になり得ることを、直感的に気づいているからではないでしょう。少なくとも、放つておくとやっかいになるもの、として見ていいはずです。

彼らが、フォーストレコードの傘下に入ったとしても、必ずしも完全な状況とは言えません」

と秋佳は、協会が今後もフロッグスとの関係を維持し続けることを主張した。

「それはもちろんだ。しかし、もつと警戒すべきことがある。抑圧者が我々の意図に気づき、協会を直接攻撃をしてくる事態は避けなければならない。そのためにも、比較的早く自立できそうなフロッグスは、早い時期に巣立たせるのが良策だろう」協会長が言った。

「エンペリアル社の巨悪を暴く策も、早急に進めましょう。彼らがいる限りは、日本でイディアーナの源泉を育てる」とは難しいでしょう「メンフィス支部長が言った。

「すでに、その件の原案は考えてある」協会長が答えた。「向こう10年で、エンペリアルの影響力を半減させるための計画案を、後に時間を割いて説明しよう。

これは事を急いではいけない。我々の存在が彼らに敵視されないかたちで実行されなければならないからだ。

もし協会が再び存続の危機を迎えるば、それは人類の美的感覚すべてに悪影響を及ぼすことになるだろう。そして、美しいものと醜いものの定義は、権力者、抑圧者たちによって決定され、それによつて、この社会は彼らが支配しやすいような差別、偏見が横行する、野蛮な世界と化すだろう

協会長は単に保身からそのように言つているのではない、と秋佳は自分に言い聞かせていた。協会は、これからも恒久的にアーティストを支援していかなければならないのだから。

「鋼君の死の真相を世間に明るみにしていくことは容易ではないが、協会としてはこれを成し遂げなければならない。

一方で、アーティストにとって、復讐心ほど致命的な毒はない。怜君、莊太君が、それに侵されることのないよう、東京支部では引き続き充分、注意してほしい」協会長は続けた。

「はい」秋佳はうなづいた。

フロッグスの野外ライブは、瞬く間に評判となつていた。

ネット上では口コミが広がり、その場にいた者達のほとんどが感じた、名状し難い音体験について、終わりのない議論があちこちのサイトで行われた。そしてまた、フロッグスのファンサイトが次々と開設されていった。

競合イベントを主催していた、トラッド・ロック・マガジンのライターも一人だけ観に来ていたようで、彼は公式ページ上で、はばかりなくフロッグスを絶賛した。

「フロッグスのサウンドは原初的なパワーに満ち、しかも先鋭的だ。

未だジャンル名すらない、新世代の音楽を予感させるに充分だつた。観客はトライアンド・ロック・フェスに比べたら何分の一かだつただろつ。しかし、1969年のあのフリー・ライブで、歴史上最も偉大なギターリストと呼ばれた彼が出演したときも、観客はまばらだつたのだ」

と、屈指の伝説的コンサートまで引き合いに出して、褒めちぎつたのだった。

フロッグスのアルバムはその後、それ以前の何十倍という驚異的な売れ行きを見せた。しかしその人気は、世間のメインストリームにある情報には、一切現れなかつた。どの企業が集計しているヒットチャートにも、フロッグスの名前がランク圏内に上ることは決してなかつたのだ。

「移籍？」

怜は突然の話に驚いた。

アイオンレコードの事務所の応接室だつた。

「先日のライブのトリに出ていたパット・ディヴィスが、フロッグスのことをすごく気に入つてね。フロッグスの活動について、相談に乗つてくれたの。それで、移籍を後押ししてくれるって」依緒はうれしそうに言つた。

続けて秋佳が説明した。

「やはり、今のフロッグスの注目度に見合つたライブやプロモーションを充分にやつしていくためには、残念だが、我々アイオンレコードではまだまだコネクションが足りないのだ。エンペリアルやウルティマのような最大手の企業から睨みを利かされている状態だとな。パット・ディヴィスは、外資系フォースレコードの所属で、フロッグスもその傘の下に入れれば、他社の圧力から逃れて、たくさんライブ活動ができるようになる」

秋佳の説明によると、ギャラやその他待遇の条件は、アイオンレコードよりもフォースレコードの方が桁違いに良い、ということだった。

思つてもみなかつたかたちで、夢のメジャー・デビューへの打診が来た。

しかし、怜はまったく納得がいかなかつた。条件の中にも、彼にとって大事なことがひとつ、抜け落ちていた。

「フロッゲスが注目を浴びて、やつとこれから、アイオンに恩返しができるんだよ?」

いくらエンペリアルやウルテーマが邪魔をしてきても、これだけ機運が高まつている状況なら、アイオンレコードにいたまでも、必ずライブ活動できる場所は見つかるはずだ、怜はそう思った。

しかし、依緒は言つた。

「怜くんは音楽シーンで正當に評価されるチャンスができたんだから、私たちから卒業するの。それがイディアーリー保護協会の意向だから

ら

「そんな、依緒はそれでいいのか?」

依緒は黙り込んだ。

「いつしょにライブツアーハーに出て、いろんな場所を回つて、たくさんのファンと出会つて・・・。そういう経験がこれからできるんだよ。依緒がマネージャーとしてオレたちについてきてもらわないと・・・。」

「私だつて!」依緒は顔を真つ赤にして言つた。「私だつて、ね・・・

・・・

秋佳が代わつて話し始めた。

「怜君、アイオンレコードは君を見捨てる訳じやない。これからも、君の活動を距離をおいて見守り、必要な時にはできる限り協力する。イディアーリー保護協会は、過去何百年もの間、数えきれないほどたくさんの方々のアーティストの活動を支援してきたつもりだ。しかし、ア

一ティスト自身の幸福まで考えてきたか、と言われば、たくさん の課題がある。

協会員の注意が充分でなかつたため、音楽家たちの中には、社会 の抑圧に押しつぶされ、若くして命を落としてしまつた者も多い。アーティストの幸福よりも、芸術自体を重視してきただめだ。

しかしこれからは、その反省を踏まえてやつていきたい。特に今 の日本は、誠実なアーティストに対する抑圧が厳しいところだ。何か問題が起これば、我々はすぐに飛んでいく。それが、協会の役割だからな

そういうと、感情が溢れるのを必死にこらえている依緒の肩を軽く叩いた。

「あとは君たちの問題だ。しばらく、ふたりで話しなさい」

そう言つと、秋佳は応接室を出ていった。

「依緒、ごめん……今まで、何もしてあげられなくて」
依緒は、息を荒げながら首を横に振った。

「怜くんは……一生かかってもできないかもしれないことを、たつた一年足らずでやってくれたんだよ……」

依緒は手の甲で眼をぬぐつて、笑つてみせた。

「……最初にマネージメントしたのが、怜くんで本当に良かった よ」

「依緒……依緒、これからも、オレたち……」

それ以上言葉が見つからない怜に、依緒は明るい声で言った。

「私、しばらく日本を離れるの。メンフィス支部へ協会員研修に行くから。もしかしたら、そのまま、そこで仕事を続けることになるかも。だから……時々アイオンから、怜くんに連絡は入れると思つけど、担当は交代になると思つ……」

「そうか」怜は肩を落とした。

「わかった……今までのこと、ほんとに、感謝してる」やう言つた怜の声は震えていた。

その言葉を聞き終わらないうちに、依緒はさつと背中を向けた。

「私もだよ、それじゃあね」息をしゃくり上げて、依緒が最後の一言を告げた。

依緒は足早にドアへ向かい、そのまま振り返らなかつた。

メジャーデビューすることが、自分の人生の最大の目標であるかのように考えていた時期もあつた怜。それが達成されれば、自分は生まれ変わることができる、と。

しかし、それは彼にとって、意外にあつけないものでもあつた。デビューすることで、自分が自分以上の何か特別な存在になれる、という過大な幻想が終わつたのだつた。

霜井怜率いるフロッグスは、移籍後、ベースとキーボードに新メンバーを加え、パット・ディヴィスの全米ツアーオープニングアクトの前座に抜擢された。

怜と莊太にとつて、最初の海外旅行でもあつた。

もし依緒が手を差し伸べてくれなかつたら、できなかつた経験。見られなかつた景色。出会えなかつた人々。聴けなかつた音楽。そうしたものに囮まれた毎日となつた。

言葉の壁がないフロッグスのインストゥルメンタルは、アメリカでも瞬く間に注目の人となり、ツアーハンブルは途中から毎公演が満員となつた。

イエローアウルにいた頃の怜は、インタビューなどで「富と名声のために音楽をやつしているわけじゃない」と答える有名ヒュージシャン達の言葉を、きれい事のように感じていた。

しかし、依緒との出会いを経て、今、パットの音楽にかける真摯

な姿勢を間近で見るにつれ、音楽家を満たしきるものは、やはり音楽そのものしかない、ということを認めざるを得なくなっていた。

その後半年間、怜は依緒とメールでやりとりを続けていた。

依緒は、メンフィスでの新しい環境に適応することの大変さを、素直に書いてきた。マネージャーだった頃の彼女のグチをあまり聞いたことがなかった怜にとっては、距離が離れたことで、かえって依緒を感じるようになっていた。

全米ツアーの途中、その日、怜は現地のガイドの車の助手席に乗り、二ードルズ・ハイウェイからの街の景色を眺めていた。

普段、怜はわがままは一切言わなかつたが、この日だけは、ガイドが組んでくれていた、仕事の合間の観光予定を一人だけ抜け出して、別行動にしてほしいと頼んだ。

ガイドは早朝に車を出して、往復で1時間ほど目的地へ、怜を送つてくれることになった。

怜も、ブルースの源流のひとつと言われるこの土地の観光を、結束の固まってきた新生フロッグスのメンバー達といっしょにしたいという気持ちがあった。

しかし、怜にはどうしても行かなければいけないところがあつた。イディアーリー保護協会のメンフィス支部、依緒から招かれたその場所である。

(今まで依緒が常にリードしてくれた。依緒が敷いたレールを歩いただけだった。でも、これからはオレが依緒を導いていきたい。音楽以外には何も持っていない自分に、その資格があるのかどうかはわからないけど)

怜は、依緒に会つて、最初にどんな言葉をかけるべきかを考えた。すると、言葉の代わりに、新しいメロディが頭の中で鳴り出した。楽音のイデイアーガ、怜の頭の中でリフレインし始める。この世に表出し、空気を振動させることを欲する、短くも美しいメロディーの繰り返し。やがて世界中を駆け巡ることになるその旋律が、怜の想いを端的に表していた。

第1-4章（後書き）

最後まで読んでいただき、誠にありがとうございました。
広げ過ぎた風呂敷がたたみきれていらない感もあるので、所々加筆修正
正しつつ、いつか続編を書きたいとは思います。
そこでは、グンと成長して圧倒的なパワーを持つ怜も描いてみたい
など。

よろしかつたら「感想下さー」。よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4048o/>

楽音のイディア

2010年11月16日08時40分発行